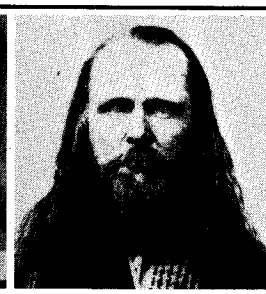
聖徒の道

12 1977



末日聖徒イエス・キリスト教会

1977年 12月号

もくじ

感謝の贈り物……スペンサー・W・キンボール……597
霊界は私たちの次の住まいである……デール・C・モーリッツェン……599
子供たちに天父との対話について教える…スティーブン・R・カビイ サンドラ・カビイ……605
「2,000人があなたのためにお祈りしているのよ」……リン・ニーメイヤー……608
ランタンのきせき……バーナディーン・ビーティー……609
まいにちをクリスマスにしよう……612
大かんちょうかいのクリスマスの思い出……615
クリスマスの客……アーネスト・N・エクロフ……618
予言者の最後のクリスマス……アルバート・L・ゾベル・ジュニア……619
飢え渇き，教えること……セオ・E・マキーン……621
準備の状態に応じて教える……ボイド・K・パッカー……624
ローカル・ニュース……626

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレー
マービン・J・アシュトン
L・トム・ペリー
マリオン・D・ハンクス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）
ロジャー・ギリング（デザイナー）

「聖徒の道」

八木沼　修一（翻訳部長）

聖徒の道 12月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
印刷所　株式会社　精興社
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定　価　年間予約1,700円　1部150円
海外予約1,700円
INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号　東京0－41512
口座名　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

大管長会メッセージ

感謝の贈り物

大管長 スペンサー・W・キンボール

クリスマスに私たちが贈ることのできる贈り物のひとつは，感謝です。これは，本人でなければできない贈り物です。私は，お世話になった人々に，私の感謝の気持ちを述べたいと思います。

何よりもまず私は，これまで常に変わらず私を支え励ましてくれた妻と子供たちに感謝したいと思います。

私は誠実で手腕のある立派なふたりの副管長に，また，世の救い主の特別の証人として働いている十二使徒，大祝福師，七十人第一定員会の兄弟たちに感謝しています。また，貧しい人，困っている人のために特別な責任をもって働いている管理監督会の兄弟たちに感謝しています。

私は教会員の皆さんにも感謝しています。皆さんの親切と惜しみない態度に感謝を申し述べたいと思います。

私はまた，172年前のこの12月に生まれた予言者ジョセフ・スミスに感謝しています。私たちは予言者ジョセフ・スミスについて世の賛辞を得る必要はありませんが，興味深いのは，主なるイエス・キリストの指示の下にジョセフ・スミスによって建てられた宗教について，トルストイが述べている言葉です。

「モルモンの人々は……天と，それに伴う栄光について教えられているばかりでなく，社交と経済の面でどのように他の人々と健全な関係を築いていくかについても学んでいる。もし人々がこの教会の教えに従って生活するなら，彼らの進歩をさえぎるものは何もなく，彼らは永遠に進歩し続けるであろう。過去には偉大な運動もあったが，それらは達成される前に消滅したり変更が加えられたりした。もしモルモンの人々が3，4代にわたって教義を曲げずに忍耐し続けるなら，彼らは世の人々がかつて知らないほどの大きな力を持つようになるであろう。」（「奇しきみわざ」p.373）

私は，神の王国が発展していることを感謝しています。現在，教会には教会史上最も多い約2万6千人の専任宣教師がいます。こんなにも大勢の素晴らしい兄弟姉妹が世界に出て行って，よきおとずれを伝えているのです。イエスは，今も生きてご自身の王国である教会を導いておられるということを宣べ伝えているのです。クリスマスは，このことを認識するまたとないよい機会です。

福音のよきおとずれによって，イエス・キリストの聖なる使命を理解した何万という人々が王国に導かれています。そしてこのクリスマスの季節は，そのことを思い起こす最良の時期です。

聖徒の皆さんが貧しく困っている人々のために，断食献金という形で快く献金しておられることは喜ばしいことです。クリスマスの季節を迎えて思い出すのは，ヨセフとマリヤに休む部屋がなかったことです。しかし現在，聖徒たちは貧しく困っている人々が無視されることのないように心を配っています。しかも聖徒たちはそれを主の方法で行なっています。

多くの若い兄弟姉妹が神殿で今も永世にもわたる結婚をしているということを聞くのは，私の大きな喜びです。神殿結婚は今世紀に入って非常に多くなっています。

聖餐会に出席して救い主の教えやメッセージを聞く教会員の割合も増加しています。

兄弟姉妹の皆さん，このように感謝することはたくさんあります。私は天父と皆さん一人一人に感謝しています。クリスマスは受けている恵みをよく考えると共に，新年に向かって備えをする時でもあります。決意を新たにし，新たな個人の目標を立てる時なのです。このように受けている恵みを数えあげてみると，私たちはより一層感謝の気持ちを増し，決意を強めることができるに違いありません。

どうぞあなたの家庭でも同じように行なって下さい。恵みを数え上げ，あなたの永遠の伴侶に，子供たちに，また両親に感謝を表わして下さい。

兄弟姉妹の皆さん，私たちは主に受け入れられるような生活を送るならば，世の人々に受け入れられなくても，別に気にすることはありません。福音は私たちに永遠の生命の望みを与えてくれるばかりでなく，この世の生き方も示してくれます。世の多くの人々は死ですべてが終わると考え，希望を失っていますが，私たちは復活が実際に起こることを知っています。不死不滅と永遠の生命は世の無目的と著しい対照をなしていますが，同様に，聖徒たちの義しい生活も世の生活と好対照をなしています。いつでも明かりの中に油があるようにしましょう。聖霊の賜を得られるような生活をしようではありませんか。

これもまた大切なことですが，個人の偉大さは必ずしもその人の生活程度によるのではなく，生活の内容によって計られるということを忘れてはなりません。真の偉大さは，仕事の力量ではなく，どのような仕事であれ果たした仕事の内容によって決まるのです。そのような心構えで，私たちの時間と体力と才能を今も，今から1千年後も，大切なもののために捧げようではありませんか。

世界の情勢が悲劇的な様相を呈することはあっても，私たちはクリスマスの時ばかりでなくいつも，大いに元気を出して務めに励む必要があります。

「さてわれ誠に汝らに告ぐ，一人に言うところは万人に言うなり。幼児らよ，心安かれ。われ汝らの唯中にあり。而して，われ汝らを捨てしことなければなり。」（教義と聖約61：36）

「この故に，汝ら大いに元気を出して怖るることなかれ，そは主なるわれ汝らと共に在りて汝らを護ればなり。されば汝ら，われすなわちイエス・キリストに就きて，われは生ける神の子，昔在り，今在り，後に来るべき者なることを証すべし。」（教義と聖約68：6）

主は私たちのただ中にあって，私たちと共にあり，また私たちを守り導いて下さいます。

私たちは，イエスがお生まれになったのは実際は春であったことを知っていますが，喜んでこの季節に多くの人々と共にイエスの誕生をお祝いしています。春は新しい生気を感じさせる希望の象徴です。教会員はこのクリスマスの季節を他の人々と共に祝うとはいえ，イエスの誕生の事実を受け入れなくなったわけでも，復活の事実を信じないわけでもありません。私たちは，キリストの導きと恵みを施すみ業はカルバリの十字架で終わったのではなく，復活まで続いたことを知っています。少なくともこのことを信じないで，真のクリスチャンになることはできないのです。

イエスの死と苦しみを強調して，主の業は完成しなかったと言う人々もいますが，私たちは神の目的が破られずに成就したことを知っています。私たちは，キリストのオリブ山からの昇天がベツレヘムでも誕生と同じように真実であることを知っています。また，キリストは飼い葉おけの中に寝かされていた誕生の時とは対象的に，大いなる威勢と威厳とをもって再臨されることを知っています。

それ故，天父が私たちに贈って下さった最大の賜を思い起こし，いつでも人々に贈り物をするようにしたいものです。

「もし汝わが誡命を守り終りまで忍ぶならば永遠の生命を得ん。これ神のあらゆる賜の中最大なるものなり。」（教義と聖約14：7）

願わくはこの大いなる賜に対する感謝の念を深めることができますように。そして神の目的のためにすべてを投げ打って感謝の気持ちを表わすことができますように。

救い主は，「わたしについてきなさい」と言われました。救い主に従うことは不可能なことではありません。だれもが救い主の歩まれた道を歩くことができます。それは，主も一度に一歩ずつ，歩まれたからです。あなたもナザレからガリラヤの海まで歩くことができます。ヨセフとマリヤとイエスに従ってエジプトに行くこともできます。また変貌の山に登ったり，エルサレムからベツレヘム，死海，ベタニヤ，ヨルダン川の間を行き来することができます。あなたには以上のことがすべてできます。しかし，主はそのように従うことは望んでおられませんでした。主が「わたしについてきなさい」と言われたのは，主の教えと模範に従いなさいという意味だったのです。普通の健康の持ち主であればだれでも，イエスが歩まれた道のりを歩き，山に登り，川を渡ることができます。しかしこれは，イエスがニーファイ人に向かって，「われと同じ人物ならざるべからず」（Ⅲニーファイ27：27）と言われたことは，全く別の問題です。

楽しく幸せなクリスマスの時を過ごされますように。平安が皆様方にありますように。

イエスは言われました。「見よ，われは神の子イエス・キリストなり。われは天地とその中にある万物を造れり。われは最初より御父と共に在りき。而して今，われは御父はすでにわれによりてその御名の栄えを示したまえり。

われは，わが民のところへ降りしが，わが民はわれを受け容れざりき。すなわち，われが来ることを示す聖文はすでに事実となりたり。

われは世の光にしてまた世の生命なり。われはアルパにしてオメガなり。始めにして終りなり。

この故に，悔い改めて幼児のごとくわれに来る者は，われことごとくこれを受け容るべし。かかる者はすでに神の王国に居る者と同じなればなり。見よ，われはかれらのために一度わが生命を捨てて，また生命を得たり。故に，世界の隅々に至る者たちよ。悔い改めをなし，われに来りて救いを受けよ』と。」

神は生きておられます。イエスはキリストであり，福音には時を越えた聖なる真理が含まれています。イエス・キリストのみ名により証致します。アーメン。

霊界は私たちの次の住まいである

デール・C・モーリッツェン

私はこれまで各地で「死後の世界はどんな所だろうか」という話に耳を傾け，またその対話に参加してきたが，そうした時に，ほとんど例外なくふたつの感情が表われることに気づいた。そのひとつは現世を去った後の霊界（以下単に霊界と呼ぶ）について知りたいという強い希望であり，もうひとつはそのような疑問は持たないのがよいのではないかという気遣いである。私たちは霊界について話してはならないとでも言うかのようである。

神聖な事柄について論じ合うのを慎もうとする態度は，常に大切であると思う。特に今の社会では霊界というと人騒がせな幽霊の話や悪魔の崇拝，その他様々な事柄を連想するのでなおさらである。しかし知りたいという望みを持つこと自体は良いことである。すでに世を去った私たちの愛する親戚は，その世界に住んでおり，私たちも間もなくそこへ行くはずである。このテーマは健全で，神聖である。従って，そのことをわきまえた上で論ずるようにすべきである。

予言者ジョセフ・スミスは聖徒たちに，「生と死の目的について学ばなければならない。他の何にも増して熱心に昼も夜も研究しなさい」と述べている。「もし私たちに天父に何かを求める権利があるとすれば，それはこの重要な事柄についての知識である」と彼は言っている。（*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.324）

私たちには，存在していることの本質的な意味について理解する権利があると言える。また私たちはその意味について探究する責任も負っているのである。その理由は，霊界が確かに現世の延長であることをよく知れば知るほど，この世の宝に心を奪われなくなるからである。

私たちが受け継いでいる遺産の中に非常に美しい物語がひとつある。それはヒーバー・J・グラント大管長の経験である。この話は，生と死と霊界の正しい関係について証を持てば，人の死に際して慰めが得られ，神の目的を理解し，現世の真の意義を知ることができるということを告げている。グラント大管長は次のように書いている。

「私は息子をふたりしか恵まれなかった。そしてひとりは5歳で，もうひとりは7歳で死んでしまった。後で死んだ息子の死因は股関節病であった。私はこの子が大きくなって福音を国の内外に説き，私の誇りとなってくれることを大いに期待していた。この子が死ぬ約1時間前に，私は夢を見た。この夢の中で，すでに世を去っていた母親がこの息子を迎えにきた。彼女はひとりの使いを伴っており，私が眠っている間に子供を連れて行こうとこの使いに話していた。夢の中で私は目を覚まし，息子をしっかり抱きかかえて連れていかれないようにした。そしてとうとう迎えにきた使いの手に渡さずにすんだ。ところがそうする内に，私はつまずいて息子の上に倒れかかってしまった。

私は息子の患部に倒れかかった。息子は恐ろしい叫び声をあげ，痛がった。私はその声を聞いて，気が狂いそうになった。私は息子の苦しむ声を聞いていられず，耐えられなくなって立ち上がると，家の外へ駆け出した。夢の中で家を出ると，私はジョセフ・E・テイラー兄弟に会い，これまでのことを話した。

すると彼は言った。『ヒーバー，妻が子供を引き取りにきたら，私ならどうすると思う。私は子供を離すまいと戦ったりしないよ。妻が子供を連れ去ろうとするのをとめないよ。この世で忠実であった母親は死んで来世に行ったら，子供が味わう苦痛や苦悩があらかじめわかるのではないだろうか。障害者として一生を送れるかどうか，またその子を現世の苦しみから解き放つ方が賢明かどうかを知っているのではないだろうか。グラント兄弟，あの子の母親は彼に命を与えるために死の谷陰におりて行ったんだよ。そのことを考えると，あの子を連れて行くかそのままにしておくかを決める権利は，彼女にあるのではないだろうか。』

そこで私は答えた。『あなたのおっしゃる通りです，テイラー兄弟。もし妻がもう一度来たら，反対せずにあの子を渡すことにします。』

このように答えたところで，その夜病気の息子の看病を手伝いに来ていた弟のB.F.グラントに起こされた。弟は私を部屋の中に呼んで，息子が死にかけていることを告

げた。私は居間に行って椅子に腰かけた。私と今生きている妻の間に椅子が一脚あった。私は息子のすでにこの世にいない母親がその椅子にすわっているのを感じた。そのことを誰にも言わなかったが，今の妻に向かって，『何か変わった感じがしないかね』と尋ねたところ，『ええ，ヒーバーのお母さんが私たちの間にすわっていて，この子を引き取ろうとしているようですわ』と答えた。

私は生来感じやすい人間であると考えている。私はひとりっ子であったので，母親の愛を一身に受けて成長した。私は自然に感情を表わす者となり，友だちが成功した時には喜びの涙を流し，友だちに不幸があると悲しみの涙を流すことが多かった。しかし幼い息子の死の床にあって，私は涙を流さずに息子を見守っていた。妻も弟も私もこの時快い，安らかな天の力を感じた。これは私の人生で最も大いなる経験であった。」(*Improvement Era*「インプルーブメント・エラ」1940年6月号，p. 330, 383)

末日聖徒の教義によれば，死後の霊界は，すべての死者が，霊と体が二度と分かつことのないように結合する復活の時を待つ場所である。従って霊界は父なる神や，復活した主，その他復活した人々が住む場所ではない。霊界とは人々が復活を待つ中間的な状態であって，体を離れた霊はここで地上の生活の善し悪しによっていろいろな状況の下に暮らすことになる。

これらの状態について，アルマは息子コリアントンに次のように語っている。「あらゆる人の霊はそれが善であっても悪であっても，この死ななくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神のところへ帰るのである。」(アルマ40：11)　アルマは天使が彼にこのことを告げたと語った。これは神のみ前に，言いかえれば神の住みたもう星へ連れて行かれるという意味ではなく，霊界に行くという意味である。アルマはさらに続けている。「それから義しい人の霊はパラダイスととなえる幸福な有様，すなわち安息と平和な有様に入り一切のわずらいと憂いと悲しみとを離れて息(やす)む。」(アルマ40：12) モロナイは死ぬ直前に霊界のこの祝福された状態に入ることを考えて，次のように書いている。「私はじきに行って私の霊と私の体とが再び相合するまで神のパラダイスで安息に就く。私は勝利を得て空を飛んで来て，生きている者と死んでいる者との永遠の裁判官である偉大なエホバの楽しい法廷であなたたちに逢う。」(モロナイ10：34)

しかしすべての人がパラダイスで安息を得られるわけではない。アルマはこのことを次のように明らかにしている。「悪人の霊は少しも主の『みたま』とかかわりがなく善いことよりも悪いことを好んだので悪魔が入ってそれらの者を支配していた。それであるから，これらの者の霊はそとの暗やみの有様に追い出され，泣き悲しんで歯がみをするのである。」(アルマ40：13)

パラダイスが義人の永遠の住まいでないのと同様，霊界の獄も悪人の永遠の住まいではない。予言者ジョセフ・スミスは，星の光栄の世界の示現について次のように書いている。「これらの者は，主すなわち子羊なるキリストがその御業を為し終えたもうときまで，すなわち最後の復活に至るまで悪魔より贖われざらん。」(教義と聖約76：85) また次のようにも書いている。「これらの者はキリストが脚の下にすべての敵を征服し，その御業を完うせらるるその時の満つるまで地獄に投げ入れられ，全能の神の怒りを受けて苦しむべき者なり。」(教義と聖約76：106，黙示録20：13参照) 霊界における獄は人が復活する時に終りを告げる。キリストの贖いのおかげで，人は最終的には解放されるのである(IIニーファイ9：6—12参照)。しかしいつまでも「汚れた」ままでいる者(滅亡(ほろび)の子)は獄に留まる。けれどもこれは霊界の獄とは別の場所である(教義と聖約76：43—49参照)。滅亡の子が復活すると，霊界に住む者はひとりもいなくなってしまう。

ペテロは霊界のことを「獄」と呼んでいる。事実一部の者にとっては本当に獄である(Iペテロ3：18—20；4：6)。しかし霊界はどちらかと言えば学ぶ所，待つ所であって，苦しむ所ではない。現世で福音を受け入れる機会のなかった者や，十分に受け入れる機会がなく拒んだ者はここで教えられる。ロレンゾ・スノー大管長は，十二使徒定員会会長をしていた1893年に，総大会で次のように宣言した。「福音が獄にいる霊たちに宣べ伝えられる時，その成果は，現世で長老が説いて得られる成果よりはるかに大きい。福音を説かれた時に受け入れない霊はごくわずかであると私は信じている。霊界の状態は現世より何千倍も好ましいであろう。」(*Millennial Star*「ミレニアル・スター」56：50)

要するに，霊界は善悪を問わず全人類の霊の仮の住まいなのである。それでジョセフ・スミスは，「義人も悪人も復活するまで同じ霊界へ行く」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 310) と宣言したのであった。しかし，なぜイエスは死を目前にした盗賊にあなたは死後私と共にパラダイスにいるであろうと約束されたのであろうか，と疑問に思う人がいるだろう。予言者ジョセフは次のように説いている。「欽定訳の翻訳者はパラダイスと訳出している。しかし，パラダイスとは何であろうか。これは近代の言葉であって，イエスが使われた元の言葉を全く表わしていない。パラダイスという言葉の原語を捜してみるとよい。これを捜し出すのは干し草の山の中から針を捜すようなものである。さあ，博識な人々よ，論じ合おう。ギリシャ語の原語にはパラダイスを意味する要素は全くない。この時の意味はこう

であった。すなわち，『あなたはきょう，わたしと一緒に霊界にいるであろう。』私は皆さんにすべてのことを教え，皆さんの問いに答えよう。ペテロが語っているように，イエスは霊（獄にいる霊，Ⅰペテロ3：19），霊の世界へ行って教えを説き，それを受け入れる者がこの世に住む者によって身代りの儀式を通じて救われるようにされたのである。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.309）さらに予言者は次のように言っている。「ギリシャ語のハデスとヘブル語のシェオルは共に霊界を意味する。ハデスもシェオルも，パラダイスも獄も皆同じであって，霊の世界である。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.310）予言者のこの説明によって救い主の言葉が理解しやすくなる。

末日の啓示も，霊界が存在する意味について理解を助けてくれる。例えば，霊は触知し得る存在である。ブリガム・ヤング大管長は次のように言っている。「霊は微細な物質でできており，霊よりもきめのあらい組織である体には触知し得ない。しかし，体と体が互いに見慣れているように，霊と霊も互いに見慣れた存在である。」（*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」p.379。教義と聖約131：7—8参照）

霊界の場所であるが，予言者ジョセフ・スミスは，私たちに非常に近い所にあると教えている。ある葬儀の説教で，彼は，義人の霊は「高められ，さらに大いなる栄光に満ちた業に携わる。従って彼らの霊界への旅立ちは祝福である。彼らは燃える炎に囲まれ，私たちから遠くない所にいる」と語っている。（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.326）

霊界を訪れた後，ロレンゾ・スノー大管長によって現世に呼び戻された姉妹がいる。彼女は，予言者が教えた事柄の直接の経験者である。「ある霊たちから，地上にいる友人や親戚について尋ねられた。その中に私のいとこがいた。彼は私に，自分の家族がどうしているかを聞き，息子たちの中にたばこやアルコール，その他体に害のあるものを吸ったり飲んだりしている者がいるのを知って悲しい，と言った。」（リロイ・C・スノー，「死からよみがえった私」。エラ・ジェンセンの話，「インプルーブメント・エラ」，1929年10月，p.974）確かに死んだ私たちの身内は，私たちの幸せに深い関心を寄せており，必要であれば警告し，叱責し，教えを施すために送られることがある。

◇　　◇

「霊は微細な物質でできており，霊よりもきめのあらい組織である体には触知し得ない。しかし，体と体が互いに見慣れているように，霊と霊も互いに見慣れた存在である。」

◇　　◇

ヤング大管長は霊界が「この地上にある」ことを確認している（「ブリガム・ヤング説教集」p.376）。最近の総大会でエズラ・タフト・ベンソン会長は，次のように語っている。「霊界は遠くない。時々この世と来世を隔てる幕は非常に薄くなる。この世を去った私たちの愛する者は遠くにいるのではない。」（*Engisn*「エンサイン」1971年6月号，p.33）

明らかに霊界は物質の世界と結びつきをもっている。私たちの肉体に霊が宿っているのとちょうど同じように，地球にも霊がある。パーレー・P・プラット長老は次のように書いている。「霊界は私たちが生まれたこの惑星上にある。言い換えれば，地球も同様の他の惑星も，外観の物質界と同時に内面の霊的世界を持ち合わせているのである。前者には物質の幕屋を持った人々が住み，後者には霊が住む。ふたつの世界の間には幕が引かれており，物質界に住む人人は霊界にあるものを一切見ることができない。」（*Key to Theology*「神学の鍵」pp.126—27）

霊界における義人の霊が，地上におけると同様，家族や定員会に組織されていることは確かである。神権は地上におけると同様，霊界においても行使されている。ブリガム・ヤング大管長は次のように述べている。「この神権を持つ忠実な長老たちは，霊界に行く時に，地上で肉体に宿っていた時に持っていたと同じ権能と神権を携えて行く。」（「ブリガム・ヤング説教集」p.132。教義と聖約124：130参照）このように神権の祝福は霊界にも及ぶ。死んで幕のかなたへ行った後，再び戻ってきたある長老が，そこで見た秩序について次のように語っている。

「私は霊界で人々が忙しそうにしているのを見た。また完全によく組織されて働いていた。それは私たちがこの世で行なっていることの継続のように私には思えた。丁度，あるステーキ部から別のステーキ部へ移るようなものであった。特に変わって見えるものは何もなく，すべてが自然であった。」（ピーター・E・ジョンソン　*Relief Society Magazine*「扶助協会誌」1920年8月号，p.455）エラ・ジェンセンも霊界を訪れた時にこれに似た経験をしている。この姉妹の経験について語った故ラドガー・クローソン長老（十二使徒定員会会員）は次のように語っている。「ひとりのガイドがいて彼女を出迎え，非常に大きな建物に連れて行った。そこには大勢の人々がいて，みな非常に忙しそうであった。怠惰な様子は全く見られなかった。」（リロイ・C・スノー「インプルーブメント・エラ」1929年10月号，p.977）しかし霊界のすべての人がこのように組織されているわけではない。なぜなら，昇栄に必要な儀式をすべての人が受けているわけではないからである。

ジョージ・アルバート・スミス大管長も，霊界に行った経験を持つが，彼は自分が見た世界の一部を次のように書いている。

「ある日，……私は自分がどこにいるのか意識を失い，現世を離れたように思った。私は大きな美しい湖を背にし，大きな森を前にして立っている自分に気がついた。人の姿はなく，湖にはボートもなかった。私がここへどのような手段で来たのか全くわからなかった。私は死すべき世の仕事を終えて，故郷に戻ったのを知った，あるいはそのように思った。私は誰かいないかと周囲を見まわし始めた。人が住んでいる気配は全くなかった。ただ大きな美しい木がたくさんはえていて，うしろには見事な湖があるだけであった。

私は辺りを調べ始め，間もなく，ほとんど人が通らず草で覆われた道が森の中へ通じているのを発見した。」スミス大管長はこの道を通っていくと，少しして祖父に会い，話を交わした。(「インプルーブメント・エラ」1947年3月号，p.139)

霊界に幼児や子供がいないことは明らかである。そこに住む人はみな大人の姿をしており，その姿形は現在に生まれてくる前の姿形と同じである。幼児や子供が死ぬと，その霊は直ちに昔の大人の姿に戻り，霊界に行く。ただ彼らが復活して再び体を得ると，当然のことながら子供としてよみがえり，義しくふさわしい両親によって育てられ，成人に成長するのである。ジョセフ・F・スミス大管長はこのことを次のように説明している。

「子供の霊はこの世に来る前から不死不滅であり，肉体の死後もこの世に来る前と同じ姿である。彼らは，肉体を持って成長していたならば，すなわち霊の大きさにまで肉体が成長していたならば呈するにちがいない姿をしている。あなたがすでにこの世を去っている子供に会う時，その子はあなたが認めることのできる子供の時代の姿で現われるかも知れない。しかし，その子が何か重要な真理を携えた使いとしてあなたのもとへ来る時は，エドワード・ハンター監督の息子（幼い子供の時に死んだ）の霊が父親のもとへ来た時のように，恐らく完全に成長した大人の姿で来るであろう。ハンター監督の息子は父に姿を現わし，『私はあなたの息子です』と言った。

ハンター監督にはそのことが理解できなかった。彼は私の父の所へ来て尋ねた。『ハイラム，これはどういう意味ですか。私は息子を幼い時に葬ったのに，息子は大人の姿で，気高く，立派な若者として私のもとへ来て，私の息子だと言いました。これはどういう意味でしょうか。』

父（祝福師，ハイラム・スミス）は，イエス・キリストの霊はこの世に生まれてくる前に完全に成長した姿であった。同じように子供たちも現世に来る前に十分成長して，霊として大人の姿をしており，現世を去った後も同じ姿を持ち，使命を果たし終えて復活した後も同じ姿を保つであろうと語った。」(*Gospel Doctrine*「福音の教義」p.260)

死んだ子供たちは明らかに男女の交際や結婚その他の機会を失っているということで，ある人々は心配する。しかし霊界に関する啓示によれば，霊界でもゆくゆくは永遠の結び固めに至る普通の交際が見られることがわかる。メルビン・J・バラード長老は次のように述べている。

「あなたがた母親は〔死んだ〕子供たちについて心配している。しかし私たちは彼らのために結び固めを行なわない。私は6歳の息子を失ったが，彼が死後霊界で大人の姿でいるのを見た。また選択の自由を行使している様と自分の意志で伴侶を選ぶのを見た。さらに，ふさわしい時に，息子やその他すべてのふさわしい人々に，主の宮居のすべての祝福と結び固めの特権が与えられるのを見た。だからこのことで心配する必要はない。彼らは大丈夫である。

さてそれでは男性に結び固められずに死んでいった娘たちはどうであろうか。……結び固めの力は永遠にこの教会にある。従って彼女たちのために何らかの措置が講じられるであろう。私たちは主が道を備えられた後からしか歩めないのである。彼女たちもいずれは諸々の祝福と特権を受けるであろう。従って，彼女たちのことは心配がない。」(ブライアント・S・ヒンクレー *Sermons and Missionary Services of Melvin J. Ballard*「メルビン・J・バラードの説教と伝道」p.260)

ジョセフ・スミスは日の光栄の王国に関する示現の中で「自己の責任を知り得る年齢に達する前に世を去った子供たちがすべて，天の日の光栄の王国において救われている」のを見ている（10節）。さらにジョセフ・F・スミス大管長は次のように説明している。

「ジョセフ・スミスは，幼くして死んだ子供は子供として復活するという教義を教え，子供を失った母親に向かって，『あなたは子供が復活の後に霊の完全な形に達するまでその子を育てる喜びと，楽しみと，満足を得るでしょう』と述べた。

死より復活した後に，回復と，成長と，発達がある。私はこの真理から多くの幸福と喜びを得，これに感謝の念を抱いている。これらの原則を啓示して下さった主に感謝している。」(「福音の教義」pp.455—56)

この真理は私の魂に豊かな幸せ，喜びを告げ，感謝の念を起こさせる。これらの原則を啓示された主に感謝すべきである。」(「福音の教義」pp.455—56) 従って私たちは，ジョセフ・スミスの言葉通りの理解を持つべきである。彼は次のようにいっている。「年とってから死ぬ人と若い時に

死ぬ人の唯一の違いは，一方が天〔霊界〕で永遠の光と栄光の内に他方より長く生き，この悲惨で邪悪な世界を少し早く解放されることにある。しかしこのような栄光に恵まれるにもかかわらず，私たちは瞬間的にこのことを忘れ，別離を悲しむことがある。けれども希望のない者のように嘆くのではない。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.197）

だからと言って，この世を去ることを心待ちにすべきであるという意味ではない。ただ，子供を失った親は福音の真理によって慰めを受けることができるということである。確かに私たちはこの世の使命を立派に果たすよう懸命に努力しなければならない。例えば，ウィルフォード・ウッドラフは若い妻フェーベが死んだ時，霊感されるままに彼女に癒しの儀式を施し，死の力を叱責した。彼はその出来事を次のように記している。

「彼女の霊は肉体に戻り，その時から回復し始めた。私たちは皆神のみ名を賛美し，神を信頼し，神の戒めを守りたいと強く感じた。

この出来事があった時に，（妻が後で述べたところによれば）彼女の霊は体を離れ，自分の体がベッドに横たわっており，姉妹たちが泣いているのを見た。彼女は姉妹たちや私を，それから自分の子供を見ていた。するとその時ふたりの人が部屋に入ってきた。……ふたりの使いの内のひとりが彼女に，あなたは霊界に行って安息に入ることもできるし，ひとつの条件が満たされるなら肉体に戻って地上の生活を続けることもできると告げた。その条件とは，夫の傍らにあって，夫が最後まで福音のために耐え続けなければならないすべての苦労，試練，かん難，苦痛を夫と共に耐えることであった。彼女は夫と子供の置かれた状況を見て言った。『はい，耐えます。』

彼女がそのように決心した瞬間，信仰の力が私の上に留まった。そして私が彼女に癒しの儀式を施した時に，妻の霊は肉体に戻ったのであった。」（*Leaves From My Journal*「私の日記から」pp.59—60）

末日聖徒は霊界で伝道が行なわれていると考えている。私たちに想像できる最も素晴らしい大がかりな伝道は，霊界で集中的に行なわれている。ブリガム・ヤング大管長は次のように宣言している。「この時代に福音を聞いた地上の住民と，福音について一度も聞いたことがなく，救いの鍵についても知らない何百万もの人々を比較していただきたい。そうすれば，あなたがたも私と同様，遂行すべき非常に大切な業が霊界にあることを結論づけるであろう。」（*Journal of Discourses*「説教集」4：285）この大切な業はどのようにして遂行されるのだろうか。この疑問に対する答えが，ジョセフ・F・スミス大管長に啓示された「死者の贖いに関する示現」の中に見られる（特に29—37節参照）

主より遣わされる使者のメッセージを受け入れるのは誰だろうか。ジョセフ・スミスが受けた日の光栄の王国に関する示現に答えを求めることができる。ジョセフ・スミスが，兄のアルビンは福音の回復される前に他界したのにどうして日の光栄の王国を受け継ぐことができるのだろうかと不思議に思っていたところ，次のような主のみ声が彼に臨んだ。

「この福音の知識なくして世を去り，もし世にとどまることを許されていれば福音を受け入れたであろうすべての人々は，神の日の光栄の王国を受け継ぐ者となるであろう。

さらに，これより後も，福音の知識なくして世を去り，かつ世にとどまっておれば心から福音を受け入れたであろう人々はすべて，この王国を受け継ぐ者となるであろう。

主なる私は，すべての人々をその行ないと心の望みに応じて裁くからである。」（7—9節）

しかし霊界で伝道が行なわれても，高貴な死者の最終的な救いが達成されるわけではない。なぜだろうか。それは死者を救うにも，生きている人を救うのと同様の努力が必要だからである。ジョセフ・スミスは次のように宣言している。「世の基が据えられる前に天において人の救いのために神権によって定められた儀式は，変更されることはない。人は皆同じ原則の下に救われなければならない。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.308）さらに予言者は次のように言っている。「人が神の完き神権を得るには，イエス・キリストが得られたのと同じ方法でそれを得なければならない。すなわち，あらゆる戒めを守り，主の宮のすべての儀式に従うことによる。」（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.308）死んだ人々も例外ではない。私たちにできるのは彼らに代わって儀式を執行することだけである。信じ，悔い改め，福音に従うのは彼ら自身でなければならない。

要するに，霊界とは体を離れた霊の行く所である。霊界は触れることのできる，実質のある領域であって，私たちが大規模な伝道を展開しているこの地球と結びついている。霊界は私たちが思っているよりも近くにあり，大勢の愛する親族との関係により私たちと結ばれている。

デール・C・モーリッツェン　カリフォルニア州サンホセのセミナリー・インスティテュートの地域指導主事，カリフォルニア州サンタクララステーキ部七十人定員会先任会長

子供たちに天父との対話について教える

スティーブン・R・カビイ
サンドラ・カビイ

サンドラ：子供の頃の，最も印象に残っている祈りは，父と姉と兄と一緒にひざまずいて，生後4ヵ月の双子の妹のリンダの命を救って下さるよう，天父にお願いした時の祈りです。

リンダは病気のため，一晩中，熱が高く，体が火のように熱い状態が続いていました。母はその双子と一緒に病院にいました。父は徹夜で看病したあと，家へ戻り，一緒に祈ろうと，疲れた体で私たちを集めました。

私たちは皆，これ以上の謙遜さはないと思われる程へりくだった父の様子を見て，驚き，そして少し不安になりました。

私は，父がそのいたいけな赤ちゃんの命を救って下さるよう，どれ程主に請い願ったか，よく覚えています。父の頬には涙が伝っていました。また，その時に天が開かれ，私はその願いが聞き届けられたという気持ちを感じました。

けれども妹のリンダが死んだ時，私は，主が私たちの願いをかなえて下さらなかったことを知りました。その理由はよくわかりませんでしたが，私は，何となく，それで良かったのだという気持ちでいました。

8児の母親となった今，私は，自分の子供たちが祈りによって天父と話をする経験を得ているだろうか，と考えることがあります。

祈るたびに，主と顔と顔を合わせて語っているように感じてほしいと子供たちに期待するのが無理なことは百も承知しています。けれども，へりくだること，天が開かれていると感じること，日常の事柄に対しても主が祈りに耳を傾けて下さっていると感じることを，子供たちにどのように教えればよいのでしょうか。私たちは，次のようなことに現在取り組み，達成しようと努めています。

スティーブン，サンドラ：私たちは親として，日々の生活の中で，効果的な祈りをすること以上に大切なことはないと確信しています。教会の大多数は問題や不幸を抱えていますが，それは，子供たちを正しく教えていないことに原因があると考えられます。こうした問題から解放されるためには，まず自分自身の家庭を「整える」ことが必要です。私たちのほとんどは，それが大切であることを頭の中では知っています。しかし，私たちは，仕事や家計，教会の責任といった「外部」の問題に心を奪われてしまうのです。

教義と聖約93章40—50節の中で，主は大管長会（ジョセフ・スミス・ジュニア，シドニー・リグドン，フレデリック・G・ウイリアムス）と管理監督（ニューエル・K・ホイットニー）に，これに関連した勧告を与えておられます。フレデリック・G・ウイリアムスに対して，主は，「汝はいまだにわが誡命に従いて汝の子供たちに光明と真理を教え居らず，さればかの悪魔はいまだ汝を支配し居れり，これ汝の苦しみを受くる所以（ゆえん）なり」と言っておられます。またニューエル・K・ホイットニーに対して，主は，彼も「また必ず懲しめを受け，その家族を整うべきものなり。その家族の者共をして，家に在りて必ず今一層勤勉に事にかかわらしめ，また常に祈りをなさしむべし。然らざれば，彼ら今居る所より立ちのかさん」と訓戒を与えられました。さらに49節には「われ一人に対して言うことは，万人に向いて言うなり。汝らかの悪魔に征服せられて，今居る所より立ちのかされざる様常に祈るべし」とあります。

どのように教えるか

教えるということは，ただ話をすればよいということではありません。子供たちが相手の場合，特にこのことが言えます。私たちは子供たちを教える場合，まず第一によい模範を示し，愛を示します。それから言い聞かせます。私たちは，あるがままの私たちを教えます。福音に従って生活をしていれば，子供たちに祈ることを教える際，どれ程効果的か知れません。何回お説教を繰り返そうとも，その比ではないのです。

子供たちは，天父についてその両親から学びます。子供たちがその両親と，包み隠しのない正直な関係を築いていれば，天父とも同じような関係を築きたいと思うものです。私たちが宣教師や学生や求道者の観察を通じて知ったことは，親が思いやりを欠き，偽善的である場合，その子供たちも天父を疑うようになるということです。子供たちは，ひどい反発を受けたり，叱られたりして，両親に対して心を閉ざし，不正直に振る舞うようになると神に対しても心を閉ざし，不正直な祈りをするようになることでしょう。

子供はいつでも親の生活をよく見ています。そして，私たちの模範を見て，福音が真実かどうかを判断しているのです。時々子供たちはこう言います。「お父さんやお母さんが祈りのことをどれ程知っていても，ぼくには関係ないよ。だってぼくのことを全く考えてくれないんだもの。」模範と無条件の愛によって教え，それを言葉で補うこと，それが鍵なのです。

祈りの様々な段階

人に対する話し方が様々なように，天父に対する話し方も様々です。他と比べて効果的なものもあれば，また満足感が得られるものもあります。ここで，もっと理解を深めるために，祈りのステップを次のように設定してみたいと思います。1)祈りの4つのステップを知る。2)心から天父に話しかける。3)天父と話す。耳を傾け，応える。

1)祈りの4つのステップを知る。私たちは子供たちにお祈りの言葉を「言う」ように教えます。子供たちは，朝起きた時や夜寝る時，両親と一緒に祈りを「言う」わけです。これは良い始め方です。こうして子供たちは，霊的な生活の最も基本的な習慣を習得するのです。私たちは，宣教師が求道者に教えていることを，子供たちにも教える必要があります。それが祈りの4つのステップです。1)「天のお父様……」2)「……を感謝します。」3)「……をお願いします。」4)「イエス・キリストのみ名により，アーメン。」

2)心から天父に話しかける。親として，思いやりと忍耐心がある場合は，子供たちにもっと高い水準の祈りを教えることが可能です。心から祈るよう教えることができるのです。何かの照合表を読み上げてでもいるかのように，同じ言葉を繰り返し繰り返し言う段階から一歩進むわけです。子供たちに心から祈る方法を教えるのに，私たちは，次のような方法や表現が役に立つことに気付きました。

a. しばらく時間を取り，だれに対して，なぜ祈るのかを考える。心を落ち着ける必要がある。
b. 家族の祈りの前に讃美歌を歌う。「祈りは楽しき」「たえず頼り」「家庭の中に」といった曲を歌う。
c. 祈りをささげるために家族が円を作ったら，何か祈りの中で特別に言って欲しいことや祝福を必要としていることがないかどうか，一人一人に尋ねる。
d. 祈りの直前に子供に次のように言う。「心の中にあることをよく考えて，それを天のお父様に言うんだよ。」
e. 適切な方法で，心からの祈りをささげた子供をほめる。「天のお父様は，あなたが自分の感じるままに祈ったから，きっと喜んでいらっしゃるよ。」
f. 子供たちに，何か特別な目的のために祈りをささげることがあることを理解させる。「神様，助けて下さい」というごく短い祈りの場合もある。
g. 子供たちが祈りのたびに同じ言葉を繰り返し，自分の言っていることについて何も考えていないということに気付いたら，子供たちがその習慣を打破できるよう助けてあげる。祈りは，場所や時を問わずにできるということを教える。
h. 家族の祈りの後，宣教師がするように，そのまま引き続いて個人の祈りをささげるとよい。
i. 子供たちに，自分たちの欲しいものよりも，むしろ必要なことについて祈るよう教える。自分の人間形成にとって，進歩にとって，また霊的な成長にとって，最上のものは何か。たとえそれが自分にとってつらい経験になろうとも，そう尋ねる。主は私たちに何が必要かを御存知である。しかし，私たちは，自分の欲するものに心を奪われがちである。

主は，主の子供たちが何を欲しているかではなく，何を必要としているかをいつも考えておられます。これは，私たちにとって，中々理解し難い教えです。特にわが家の10代の娘にとってはそうでした。娘は，高校の生徒会の指導者に選出されることが，最も重要な必要事と考えていたようです。娘は数ヵ月間，熱心に選挙運動をし，準備していました。「お母さん，私は当選するように一生懸命祈っているのよ。主は，心の中にある義しい望みなら求めてもいいっておっしゃってるわ。私の望みがそれなの。」私たちにも，十分納得のいく望みのように思えました。娘は福音の証を持っていましたし，大きな高校の中でも学友の評判が良かったのです。私たちは娘が教会のために何らかの貢献をしてくれることになるだろうと考えていました。

こうして投票日がやって来ました。娘は必ず当選するだろうとの前評判でした。ところが落選してしまったのです。娘には非常なショックでした。ほんの数票差でしたが，落選は落選です。

その翌月，娘に，高校のセミナリー役員になってほしいという依頼がきました。セミナリー評議会の役員は皆，個人的な犠牲を払って奉仕していました。セミナリーの会長は，かつて，生徒会長選挙への立候補を断念するように言われ，とてもつらいことでしたがそれを断念した経験の持ち主でした。役員たちは皆，人々の関心を呼び起こすために，娘の創造性と伝道の才能がとても必要です，と言ってくれました。そして，この年は，セミナリー・プログラムの発展に極めて大きな意義を持つ年となりました。

その年，娘は数多くの霊的な経験をしました。娘は深く強い友情を築き上げ，友達を幾人か教会活動に誘う手助けをしたのです。

その後，娘は私に，祈りと聖典の勉強によって，自分自身のことが段々とわかるようになってきたと言いました。「とにかく私はその選挙に当選したかったの。でも主は，私にはもっと別の経験が必要なことを御存知だったのね。私は霊的に成長する必要があったのね。確かにつらい経験だったわ。でも今は，あれで良かったんだって思うの。」

3)天父と話す。耳を傾け，応える。対話のある祈りでは，耳を傾け，それに応えます。私たちがよく行ないがちな対話のない祈りでは，間違って，主に助言を与えます。どこそこへ行くようにと指示を出し，だれに，どのような祝福を与えるようにと告げているようです。

a. どのように主のみ声に耳を傾ければよいか，子供たちに理解させる。

子供たちの心の中にはっきりとした期待を抱かせることが必要です。つまり，主はどのように語りかけられるかを，はっきりと教えることです。そうすれば，主のみ声を聞いた（感じた）時，すぐにそれとわかり，満たされた思いを持つことでしょう。こうなれば，祈りも意義深くなり，満足の行くものとなるはずです。

私たちは子供たちに，主は様々な方法で語りかけられるということを教える必要があります。主が私たちに語りかけられる方法は，静かな細い声により，主の予言者により，古代では聖典を通じ，現代では大会や著作物を通じて，と

多彩です。

デビッド・O・マッケイ大管長は，教会でその職務を果たしている人々には，普通，聖霊が良心を通じて語りかけると教えられました。セミナリーとインスティテュートの関係者の集会で，十二使徒評議員会のブルース・R・マッコンキー長老は，聖霊はラジオの送信機，私たちはその受信機，そしてキリストのみたまは電波にたとえられると言われました。

スティーブン：かつて私がリックスカレッジの宗教講話で，祈りの答えに耳を傾けるというテーマで話した時のことです。講話の直後に若い女性が私の所に来て，こう尋ねました。「カビイ兄弟，神様が祈りに答えて下さっているということは，どうしたらわかりますか。私が心の中で暖かく感じているものは，多分自分自身の望みか欲求であって，それを神の答えだと思い込んでいるんではないかと思うんです。」

ある日，娘のマリアに，どのように祈りの答えに耳を傾けたらよいか教えていた時のことです。「マリア，祈りの中で自分の良心に耳を傾けてごらん。それから，自分の感じたことに応えるんだ。」娘はそのためにはどうすればよいか尋ねてきました。私が娘に教えたことはこうです。何か祝福を願う時はいつも，その祝福をいただく資格を得るために，自分でできる範囲のことをすべて行なったかどうかを自問してみなさい，ということです。（「われら何にても神より祝福を受くる時は，この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」教義と聖約130：21）そうすれば，主は，娘の良心を通じ，娘の心に語りかけて下さるわけです。

マリアはこの方法に従いました。けれども，別に新しいものは与えられなかったと言いました。しかし，それは「私には，自分が何をしたらよいのかもうわかっている」という理由のためだったのです。私は，どこでそれがわかったのか尋ねました。娘は「日曜学校のクラスです」と答えました。そこで私は，日曜学校も主の王国の一部であること，そこで学んだ真理の原則が娘の心の中に蓄えられていたこと，などを説明しました。

聖霊は，それぞれの状況に応じて，必要な時に，これらの原則を思い起こさせて下さるのです。「ごらん，また言うが，前に話した道によって入り聖霊を受けるならば，聖霊はあなたたちの行わなくてはならないことをみな教えたもう。」（IIニーファイ32：5）

b.　主のみ声に応える。

私たちは現在子供たちに，自分の良心に従って生きるよう，一生懸命に教えています。また，基本的な質問をして主の答えに耳を傾けるよう教えています。たとえばこんな質問です。「もっと神様に近づくために，私は何をする必要がありますか。」「もっとよい教会員になるためにはどうすればよいでしょうか。」「どうすればもっとよく伝道のための準備ができるでしょうか。」「学校でもっとよい成績をおさめるためには，どうすればよいでしょうか。」

私たちは，まず第一に聖きみたまを求め，言葉や行ないの上で導きを得るよう，子供を励ましています。また，絶えず光と知識とを増し加えてゆけるように，教会の集会や聖典の学習に特別な注意を払うよう教えています。そうする時に，本当に，イエス・キリストのみ言葉と愛を得ることができます。そうすれば，聖霊は適切な原則を思い起こさせて，その行く手を導いて下さることでしょう。また，現在の状況やチャレンジに関した知恵にあふれる聖句を数多く暗唱するよう，子供たちを励ましています。この復習は家庭の夕べの中で行なっています。

さらに私たちは，一層多くの光と知識とを得るためには，現在受けている光と知識に忠実でなければならないことを彼らに教えています。言い換えれば，ただ自分たちの良心に従おう，そうすれば，なお必要な時には，私たちの望むままではなく，主のみ心にかなった方法で，主のみ心にかなった時に，それが主から与えられるということなのです。

ひとたび，天父との間に生き生きとした関係が持てることを発見した人は，また，神に話すのではなく，神と話すということに特別の意味があるということに気付いた人は，もう過去の自分ではありません。対人関係をも含むあらゆることに変化が起こり，必ずや，以前に増して，活気と美しさが感じられるようになるのです。

「これまで学んだことの中で，一番大切なことは何かな。」娘のシンシアの18歳の誕生日にこう尋ねてみました。すると娘は，何のためらいも見せずに，真面目な顔で次のように答えてくれました。「主イエス・キリストを基として生活を築きあげること。主を信ずる信仰を持ち，主を信頼すること。主の力に頼ること。そして，みじめな夢を見たり，失望や幻滅を感じたりしなくてもすむように，主との関係に信頼を置くこと。そうすれば必要な安心感が得られるし，自分が本当に何者なのかということがよく理解できるでしょう。ほかの人たちがどう言おうと，どう考えようとね。」

私たちは，その瞬間，何か報われ，救われたような気持ちがしました。それと同時に，ある段階を通りぬけたという思いがしました。

しかし，最後の関門を通過したわけではありません。私たちは失望も経験しています。決してやさしいことではありません。それは終りのない闘いであり，努力の積み重ねなのです。しかし私たちは，運ではなく，律法が支配していることに，そして私たちが望むなら律法に従うことができるということに，非常に勇気を得ているのです。

要するに，私たちは，これまで子供たちに，天父とどのように話すか，またその答えにどのように耳を傾け，どのように応えるかということを教えてきましたが，そうした努力が半ば報われたと感じているわけです。私たちは，家族の現在の祈りと生活のあるがままを教材として使い，子供たちを教えてきました。

私たちは，主が忍耐強く待っていて下さることに，また私たちに与えられた特別な機会に，心から感謝しています。私たちはこれからも，一生懸命に耳を傾け，この業を行ない，従い，そして教えてゆくつもりです。

「2,000人があなたのために お祈りしているのよ」

リン・ニーメイヤー

オーストラリアのビクトリア州にあるオースチン病院の小児病棟で，5歳のマシューは，くたくたになるまで物理療法を受けていました。懸命なマシューの姿に，看護婦たちの目には涙が光っていました。また，マシューの治療に当たった医師はそのような彼の姿に励まされ，彼のために特別な松葉杖を作りました。それから数日後，マシューは「魔法の杖」のおかげで歩けるようになり，意気揚々と私たちの前で歩いて見せてくれたのでした。

マシューが交通事故で頭蓋骨の骨折と出血多量で病院に担ぎ込まれたのは，ほんの10日前，1975年4月のことでした。事故が起きると間もなく，私はマシューから引き離されてしまいました。けれどもそれでよかったと思います。ただ覚えているのは，自分の部屋に入るまで気が狂ったように叫び続け，部屋に入るとひざまずいて，「主よ，あの子を取り上げないで下さい。どうか，まだ取り上げないで下さい！」と祈ったことです。

一刻を争うというのに，最初の病院では無理だということで，別の専門施設にまわされました。医師が救急車の中で，助かる見込みはまずない，仮りに命を取り留めたとしても心身障害が残るだろうと私に言いました。私は心の中で，それならむしろ死んだほうがよいと祈りました。気がつくと，交差点ごとに数人の警察官が立っていて，マシューができるだけ早く病院に着けるように，交通止めをしてくれていました。私は，見ず知らずの人々がマシューのことを思って下さっているのに，一瞬とはいえ，彼をあきらめかけた自分を恥ずかしく思いました。マシューの呼吸が何回か止まり，自分まで呼吸が止まるような思いでした。

夫のジョンと友人の方が間にあうように来て，マシューの頬に手を触れ，祝福をして下さいました。頭に手を置けなかったのです。ふたりは，マシューは主のみ手にゆだねられているという霊的な平安を感じました。それからの4時間，私たちは本当に苦しい時間を過ごしました。夫と私は語り合い，祈りながら，落ち着かずに歩きまわりました。私たちは定まらない心で何回か祈ったあとで，ようやく息子を主に託すことができました。命がなくなるか完全に回復するか，いずれでもよいという穏やかな平安をふたりとも感じたのです。

やがて医師が姿を見せ，手術が予想以上にうまくいったと語った時には，どんなにほっとしたことでしょう。思っていたほどには脳が損傷されていないということでした。彼は二度も，「神様のお恵みです」と言っていました。そして私たちもその通りだと思いました。

マシューは4日後に意識を回復し，さらに3日後に小児病棟に移されました。左半身が麻痺し，左目は失明しましたが，幸いなことに知能に異常はありませんでした。マシューは両目に涙を浮かべて，麻痺のために小さな顔をゆがめながら，「ぼく，もう歩けないんでしょう？」と聞きました。私は勇気を出して，「いいえ，歩けるわよ！2,000人以上の人たちが，あなたのために断食してお祈りして下さっているんですもの」と言いました。マシューは私の力強い言葉に少しびっくりしたようでしたが，すぐににっこりして「本当？」と聞き返しました。

その時から，マシューはただ一途に徒歩訓練に励みました。私が祈りの力を疑っていたとしても，マシューはそうではありませんでした。彼には2,000人の人々に対する責任がありました。彼らをがっかりさせたくはなかったのです。とても恥ずかしがりやの反面，一徹なところのある息子でした。忍耐心が役に立って，毎日これ以上は無理だという限界まで訓練を続けました。

実を言えば，親の私たちが驚くほど大勢の方々が心配して下さいました。事故の後，数人の友だちに電話をかけてお祈りをお願いするのがやっとでした。ところが，ニュージーランドにいる神殿職員の親友が，理由のわからないまま，私たちの名前を神殿の祈りの名簿に加えて下さったのです。彼女は，私たちがマシューの手術の結果を待っている最中だったことを知るよしもありませんでした。私はただ，彼女がそうしてくれることをお祈りしただけでした。ワード部では特別な断食日を設けて下さり，伝言がステーキ部全体に伝わって，全ステーキ部で断食とお祈りをして下さいました。この地方のメソジスト教会と英国教会でもマシューのために特別礼拝を行なって下さったことを知って，私たちは心から感謝しました。

(p.617に続く)

ランタンのきせき

お話：バーナディーン・ビーティ

ロージータは，さいごの黄色い紙を，星形の竹のわくにしっかりと，のりではりました。「さあ，これでできあがり！」ロージータはうれしそうにいいました。そして，小さいろうそくに火をつけて，そっとランタンの中に入れてみました。

「とってもきれい！」ロージータはさけびました。あと2日で，ロージータのすむフィリピンの村に，楽しいクリスマスがやってきます。クリスマスの朝は，「メリークリスマス」とつげる鐘の音で，みんな目をさます。ロージータとお友だちは，教会へ行ったあと，村の家いえを，さんび歌を歌いながらまわります。また，近くの村からお兄さんやお姉さんたちが来て，キリストのげきをしてくれます。でも，ロージータが大すきなのは，ランタンのぎょうれつです。

クリスマスの夜，フィリピンの村人たちは，自分が作ったランタンに火をともして，村中を

ねり歩くのです。そして，一ばんきれいなランタンを作った人に，しょうひんがおくられます。今年は，マニラ旅行です。

「わたしのが一ばんかもしれない。」ロージータは，にっこりしてつぶやきました。目をつむって，まだ行ったことのないマニラの町を思いうかべました。

そのとき，弟のジュアンが松葉杖をつきながら，かいだんをおりてきました。

「だめだよ，ぺぺ，おやめ！」ジュアンがとめるのも聞かず，さるのぺぺはランタンにとびつき，ひっくりかえしてしまいました。あっというまに，火がつき，ランタンはもえだしました。

ロージータは，いっしょうけんめいに火をけしながら，なきだしてしまいました。もう，きれいなランタンは，まっ黒こげです。ぺぺは，ジュアンの首にだきついて，じっとしています。

「どうしてくれるのよ！」ロージータはさけびました。「みんな，あんたと，そのばかなさるのせいよ。これで，マニラに行けなくなったじゃないの。」

「ごめんね，ロージータ。ほんとうにごめんね。」そういってジュアンは，びっこを引きながら，やけこげたランタンを手にとりました。「ぼく，なおしてみるよ。」

「だめよ。きせきがおこらな

いかぎり，むりよ。それに　ランタンにはる紙もないわ。」紙が入っていたはこには，黄や赤や緑，青，白のつかいのこしの紙しか入っていませんでした。

「でも，やってみるよ。」ジュアンは言いました。「いいのよ，どうせ，ゆうしょうなんかできなかったんだから。」ロージータはあきらめ顔でいいました。そして，本をもって，外に出て行きました。ロージータは，ジュアンにあんなにどなって，ほんとうにわるかったと思いました。ロージータはジュアンが大すきでした。足がわるくても，ジュアンはとても気がやさしい，元気な弟でした。

しばらくして，ロージータは家に帰りました。すると，ジュアンがランタンのわくをなおしていました。

「ジュアン，それをどうするの。紙はもうないのよ。」

「いいことを考えたの。」ジュアンは答えました。

ねるじかんになっても，ジュアンはまだランタンをいじっています。ロージータは，しばらく見ていましたが，まもなくねむってしまいました。

朝になりました。ロージータが目をさますと，ジュアンはまだランタンをいじっています。

「ジュアン，ぜんぜんねなかったの！」ロージータはおどろいていいました。けれども，ジュアンは，なにも答えませんでした。

ロージータは，はっとしました。赤や青，黄，緑の小さな紙が，きれいにはり合わされて，うつくしいランタンができあがっているではありませんか。

「まあ，きれい！」ロージータは，ためいきをつきました。

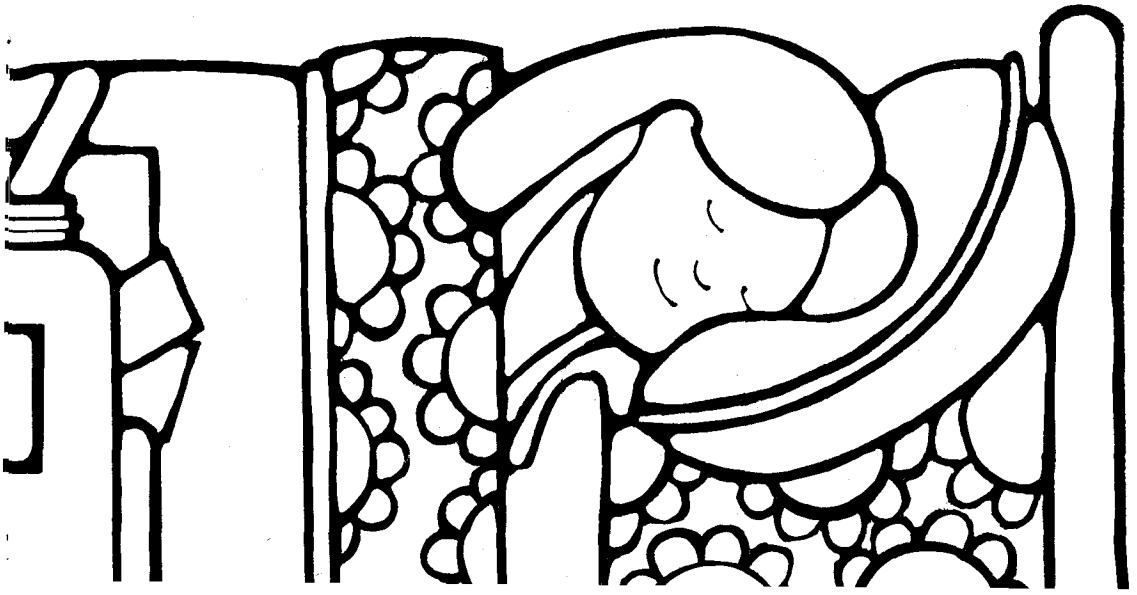
「ぼく，ちゃんとなおせたよ。きせきがおこらなくてもね。」

「ジュアン，これはきせきよ！」ロージータはさけびました。

「きせきじゃないよ。ただ，いっしょうけんめいに作っただけだよ。」

「そうね。」そういって，ロージータは，ジュアンをだきしめました。ロージータには，こんなにすばらしい弟がいるのです。ロージータのために，夜もねずにランタンを作ってくれたジュアンの愛は，何にもかえられないものです。コンテストでゆうしょうすることなど，もうどうでもよくなりました。

「ジュアン，あなたの愛がきせきを作りだしたのよ。」ロージータはやさしくいいました。



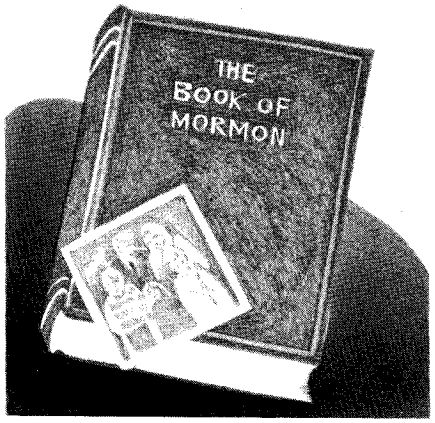
まいにちをクリ

わたしは，ジンジャー・リンです。わたしは，クリスマスがだいすきです。とくに，きょねんのクリスマスは，とてもすてきでした。

わたしのかぞくは，かみさまがくださった，しゅくふくを，いつもかんしゃして，よくおいのりをしました。そして，どのようにすれば，ほかの人にも，このしあわせな気もちを，かんじてもらえるだろうかと，みんなで話しあいました。

いろんな考えが出ました。いちばんすばらしいのは，クリスマスの日のけいかくでした。わたしたちのかぞくは大ぜいで，それに，しあわせにしてくれるふくいんがあります。わたしたちは，このふたつをつかって，ほかの人たちに，しあわせをプレゼントすることにしました。

わたしの家は，ソルトレークしんでんの近くにあります。ですから，クリスマスの日にそこへ行くことにしました。



クリスマスの日，わたしたちはプレゼントのつつみをあけ，朝ごはんを食べたあと，家のかたづけをして，夕ごはんのしたくをし，それから，わたしたちといっしょにクリスマスをすごす人をさがすため，テンプル・スクェア（ソルトレークしんでんや，ほうもんしゃセンターのあるところ）へ出かけることにしました。

わたしたちは出かける前に，おきゃくさんのために，ローソクをよういし，夕ごはんのおさらやナイフをじゅんびし，クリスマスツリーの明かりをつけました。

わたしたちは，「モルモンけい」を，なんさつかよういし，ひょうしのうらに，かぞくのしゃしんをはり，なまえとあかしをかきました。わたしたちの家へ来るおきゃくさんに，あげるためでした。

わたしたちは，かみさまがこのけいかくをたすけてくださることを知っていました。まいにち，かぞくそろって，この日のためにおいのりしてきたのです。

スマス
にしよう

けれども，家のかたづけと，夕ごはんのしたくに，とってもじかんがかかりました。そのため，ほうもんしゃセンターに行くのがおそくなり，そこに来ている人たちはみんな，もう夕ごはんをすませていました。

私たちは多くの人に声をかけ，家にまねきましたが，みんなにことわられました。けれども，天のお父さまがたすけてくださることを知っていたので，あきらめませんでした。

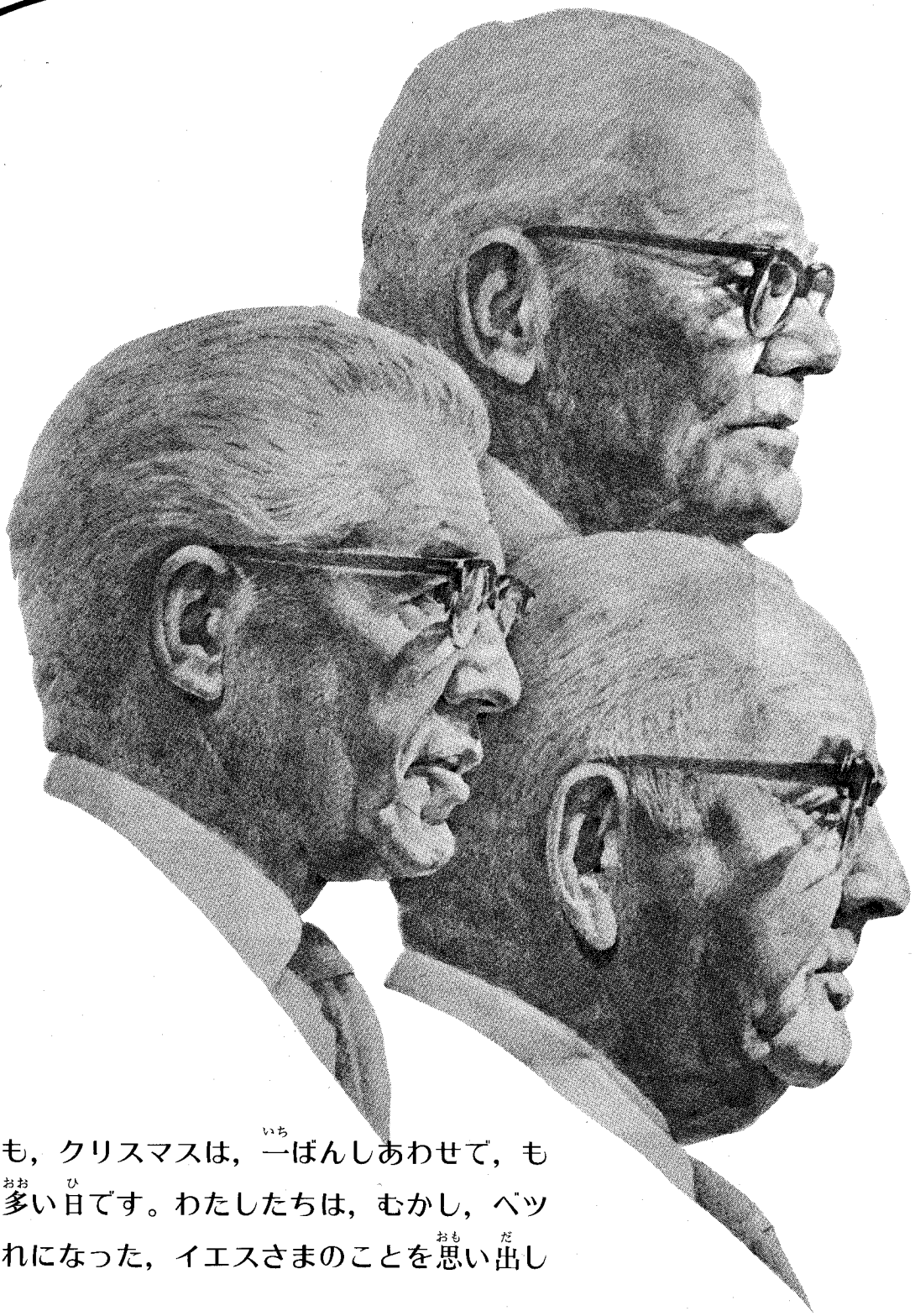
すると，ミシガンから来たかぞくが，わたしたちのさそいをよろこんでうけてくれました。お父さんと，お母さんと，17さいのお兄さんのかぞくです。まつじつせいとのことをもっとしりたくて，この町にきたということです。わたしたちにさそわれて，はじめはおどろいたようでしたが，「きょうかいのことについて，いちばんよく知ることができますね。よろこんでまいります」といって，わたしたちの家へ来てくれました。

わたしたちは，オーストラリアから来た，ふたりのおねえさんもまねきました。とてもびっくりしていましたが，まだ夕ごはんを食べていなかったので，わたしたちの家へ来ることになりました。

ほんとうにすてきなクリスマスの夜でした。みんなでいっしょに，夕ごはんを食べ，きょうかいのことを話しました。帰るときに，みんなは，なんどもおれいをいいました。ミシガンから来たかぞくは，とてもよいりょこうの思い出になったといい，クリスマスツリーの前で，わたしたちのしゃしんをとってくれました。

また，オーストラリアのふたりのおねえさんは，わたしたちが，かぞくのしゃしんをはった「モルモンけい」をプレゼントすると，すこしなみだをながしました。

みんなの帰ったあと，わたしたちは，ほんとうにしあわせでした。とてもすてきなクリスマスでした。でも，らいねんのクリスマスまで，まつことはないのです。いつでもほかの人たちに，ふくいんをつたえ，まいにちをクリスマスのようにしたいと思います。



一年のうちでも，クリスマスは，一ばんしあわせで，もっとも思い出の多い日です。わたしたちは，むかし，ベツレヘムでお生まれになった，イエスさまのことを思い出します。

キンボール大かんちょう，タナーふくかんちょう，ロムニーふくかんちょうも，イエス・キリストさまのことを，思い出します。では，大かんちょうかいの3人に，クリスマスの思い出を話していただきましょう。

大かんちょうかいのクリスマスの思い出

わたしは，クリスマスのきせつになると，ベツレヘムでお生まれになったイエスさまのこと，それにはじめてのクリスマスのことを考えます。

なん年か前，わたしとキンボールしまいは，ベツレヘムでクリスマスイブをすごしました。12月24日は，うつくしい日よう日でした。わたしたちは，その日の朝早く，イラクのバクダッドでせいさん会をひらきました。そのあと，シリアのダマスカスへ行き，それからエルサレムへ行きました。クリスマスイブをエルサレムですごそうと，せかいの国ぐにから，多くの人たちがあつまってきていました。

わたしたちは，エルサレムの町の大ぜいの人たちを見たとき，「客間には彼らのいる余地がなかった」というせいしょのことばを，思い出しました。

ごったがえした町の中を，クリスマスの歌がながれ，むかしたてられたきょうかいのやねから，かねの音が聞こえてきました。イエスさまがお生まれになったとしんじられている，小さなほらあなのあるところに，このきょうかいはたっています。

この小さなほらあなには，とびらがあり，せまいかいだんがついています。わたしたちはそのほらあなへ入ってみました。そこは，たくさんのロウソクで，明かるくてらされていました。わたしたちは，イエスさまがお生まれになったときのことを，大ぜいの人たちがいる中で，しずかに考えました。

それから，わたしたちは，「ひつじかいの野原」へ行きました。ひつじかいたちが，はじめてのクリスマスイブをむかえた，そのおかにいるのは，わたしたちだけでした。

月がとてもうつくしく，空には，星がたくさんかがやいていました。わたしたちは，「天の軍勢が現れ……神をさんびして……『いと高きところでは，神に栄光があるように，地の上では，み心にかなう人々に平和があるように』」という声を聞いたような気もちがしました。

また，そこから見ると，ベツレヘムの町の明かりが，とてもきれいでした。そして，わたしたちは，つぎのような歌を思い出しました。

「ああ，ベツレヘムよ，などかひとり……
主のたまものこそ，奇しけれや，
静かに恵みの，露はくだる。」

わたしは，ベツレヘムでクリスマスをむかえられたことと，かみさまのみ子，イエス・キリストさまを知っていることをかんしゃして，そこでおいのりをしました。わたしたちは，イエスさまの教えにしたがえば，いつか，イエスさまにお会いできるのです。

スペンサー・W・キンボール大かんちょう

わたしは8人きょうだいです。ですから，おこづかいはなく，クリスマスのおくりものは，自分たちで作りました。おくりものは少なかったのですが，とても楽しいクリスマスでした。

中でも，わたしたちにとって，一ばんすてきなおくりものは，イエスさまがお生まれになったときの話でした。わたしたちは，小さいときから，クリスマスのたびに，イエスさまのことについて話とあかしを聞きました。わたしの子どもたちも，またその子どもたちも，クリスマスには，かぞくをあつめて，イエスさまの赤ちゃんのときの話と，そのできごとがすべての人にとってとてもたいせつなことを話します。

わたしたちは，クリスマスの思い出をいつも楽しいものにしたいと思います。イエスさまの教えをいつもまもって，楽しいクリスマスをすごしたいと思います。また，わたしたちのしあわせを，ほかの人たちにもわけてあげ，しあわせなクリスマスをすごしましょう。

N・エルドン・タナーふくかんちょう

今のクリスマスは，60年前のクリスマスとは，とてもちがっています。だい一に，クリスマスツリーを用いする方ほうがちがいます。わたしが子どものころは，クリスマスツリーにする木を山に切りに行きました。そして，わたしとお兄さんは，その木を引きずって家に帰りました。けれども，引きずって帰ったので，下になった方の木のはっぱがなくなってしまいました。それでわたしたちは，はっぱのない方が見えないように，へやのかどにそれを立てました。

また，わたしたちは，いつも自分たちでツリーのかざりを作りました。紙をほそく切って，それをくさりのようにつなぎました。また，ポップコーンを作り，それを糸でつないで，ツリーのかざりにしました。

わたしたちは，クリスマスの日には，とくべつな食べものを食べました。

ガスキル・ロムニーおじさんは，工場をもっていたので，男の子のために，やきゅうのバットを作って，クリスマスのおくりものにしてくれました。また，女の子には，小さなかざりだなを作ってくれました。でも，そのころのおもちゃは，今のおもちゃほど，りっぱではありません。

けれども，クリスマスはうれしい日でした。イエスさまがお生まれになった日なのです。

マリオン・G・ロムニーふくかんちょう

みなさん，わたしたちはクリスマスに，イエスさまのたんじょう日をおいわいしますが，このイエスさまは，わたしたちの天のお父さまである，かみさまのみ子です。ことしのクリスマスが，わたしたちひとりびとりにとって，しあわせで，すばらしい日となりますように。

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

信じ難いことですが，回復は不可能と思われたあの事故から3週間後に，マシューは退院しました。目が見えるようになり，顔のひきつりはなくなり，ただ残る左手の麻痺を克服するために機能訓練を続けるだけでした。（半年の入院と言われていたというのに。）

しかし，それだけには終わりませんでした。マシューの頭は，包帯を巻いた上からでも脳が脈打っているのが見える状態でした。そこで，肋骨を2本，頭蓋骨に移植して，むき出しの脳をおおわなければなりませんでした。6月下旬の3時間にわたる手術の前日，私はひどく不安でした。マシューに私たちが愛していることを告げると，彼はとてもびっくりして，自信たっぷりに，「ぼく，死にはしないよ。また帰って来るよ」と返事をしました。その一言で，私の恐れはすっかり消えました。必ず良くなることを知ったのです。

ワード部の会員は断食と祈りをして下さり，またも医師たちは彼の回復の早さと快活さに驚いたのでした。頭蓋骨をあれほど損傷して生き残る人はそういないと医者に言われました。マシューは手術後1週間で，他の子供たちとベッドの下にもぐってかくれんぼをするほどになりました。そのため，頭をぶつけてはいけないからと退院させられました。7月下旬には再び以前のように健康になって，学校に戻りました。

あのような大事故に遭った者が，断食と祈りによって命を救われ，健康が取り戻せるものでしょうか。確かにそれはできます。私たちはそれができることを知っていますし，現実にできたのです。マシューは回復を目ざして一生懸命に努力しました。彼は「お父さんが祝福してくれたから，必ず良くなるってわかっていた」と言っています。このことが彼を動かしたのです。それに，みんなが自分のために祈っていてくれるということです。

9月に私たち家族が日曜学校で家族の発表をした時，マシューの兄や姉は参加できると思ったのですが，恥ずかしがりやのマシューはどうかと心配しました。けれどもマシューは，自分の部屋に行って，ひとりで短い話を準備しました。そしてワード部の人々を前にして，彼はとぎれがちにゆっくりと，このように証をしました。

「じこに　あったとき，……ぼくはびょういんに　はこばれました。……みんなは　ぼくが　しぬとおもいました。……おとうさんが　しゅくふくしてくれました。……だから，ぼくはちゃんと　なおりました。」

これが息子のマシューの信仰です。

リン・ニーメイヤー姉妹：オーストラリア・メルボルン・ムーラビンステーキ部クロイデンワード部所属，ステーキ部扶助協会教養教師

クリスマスの客

アーネスト・N・エクロフ

私たちはずっと前から居間の模様がえをしたいと思っていた。その時，キンボール大管長が教会員に家をきれいにしなさいと勧告されたので，クリスマスの準備の仕上げに，是非とも模様がえをしなければならないと思った。余暇を全部それに当てたが，スケジュールがつまっている上にクリスマスまであまり日数がないので，夜遅くまで働いた日が多かった。ところが，その乱雑さたるや！家具という家具はみな汚れよけのシートをかぶり，どこもかしこもゴミだらけ，なお悪いことに，カーペットが入るのはクリスマスの3日前になるという。日にちだけがどんどん過ぎて，クリスマスまでに模様がえが終えることはもはや期待薄になった。

私は長い一日が終わったある晩，クリスマスイブなのにまだ家中がごたごたしている夢を見た。クリスマスには救い主がわが家を訪れることになっていた。救い主はわが家の玄関に来られたが，私たちの仕事がまだ終わらず，玄関に鍵がかかっていたため，そのままよそへ行ってしまわれた。私は救い主が玄関に背を向けたのを見てやりきれない気持ちになった。そこで目がさめた。そして，まだクリスマスイブではなかったことに，ほっと安堵した。しかしすぐに夢のことは忘れてしまった。

模様がえの仕事はまだ続いた。ペンキを塗り，壁紙を張り，カーペットを敷いたが，クリスマスイブの前日になっても，仕事はまだまだたくさん残っていた。予定では，玄関にも壁紙を張ることになっていた。しかしもうそこまで仕事を広げる力は残っていなかった。ところが翌朝起きてみると，息子のケネスが玄関の最後の仕上げをしてくれていた。非常にきれいだった。

その日は一日たつのが非常に早かった。妻はレースのカーテンを縫ったが，クリスマスのために作らなければならないものがほかにもいろいろあって，とてもクリスマスの準備はできそうになかった。そうした心配はまさに的中した。クリスマスイブをスウェーデンの伝統料理で祝おうと，7時にお客が来たが，まだ仕度ができていなかった。私は彼らに手伝ってもらい，クリスマスツリーを飾った。

2時間遅れて夕食のテーブルが整い，ツリーも飾り終え，妻が最後の料理を運んできた。やっとクリスマスイブの夕食が始められると思ったその時，電話のベルが鳴った。

相手は，その晩町に着いたばかりの知らない人だった。合衆国中を旅行しているというスウェーデンの軍曹だった。彼はソルトレーク・シティーに住んでいるスウェーデン人と話したくて，電話帳からたまたまわが家の電話番号を見つけて私の家に電話をしたのだという。私は数分話をしたあとで，数分後にまたこちらから電話をかけますと告げた。もうすでに2時間も待っている客たちが，テーブルで私が戻って食物の祝福をするのを待っていた。私はその祈りの中で，私たちがクリスマスの本当の意味を忘れないように主の祝福を願った。しかし祈りながら，前に見た夢の一つ一つの場面がはっきりと思い出された。そしてその時，夢の中で味わったと同じやるせない気持ちを感じた。もう空腹どころではなかった。玄関をノックしたお客をそのまま帰したのだった。私はあのスウェーデン人ははたしてまだいるだろうかと心配した。彼に教えられた番号に電話をかけて彼の声を聞いた時に，私はほっとした。クリスマスイブの残りの時間をわが家へ来て一緒に過ごしませんかという申し出に彼は承諾してくれ，私は彼のホテルへ迎えに行く約束をした。

彼はスウェーデン式に玄関で靴を脱ぎ，とてもきれいですねと家をほめてくれた。そして「今年のクリスマスは良い思い出になります」と言った。私たちは大いに食べ，笑い興じて，みんなですばらしい時を過ごした。息子のケネスがスウェーデンに伝道した時の経験談を話し，私たちが教会でしていることと，その理由とを少し彼に説明した。

夜もすっかりふけてから，私は車で彼をホテルに送った。彼がわが家を訪れてとても楽しかった，見知らぬ町で全く知らない人々に親切にしてもらって本当にうれしかったと言うのを聞いて，わが家にとっても彼の来訪が非常にありがたかったことが彼にわかっていただけただろうかと考えたのだった。

私が帰宅すると妻と息子は眠っていた。そこで，私はきれいになった居間で，少しの間目を閉じて物思いにふけった。居間は完璧に仕上がっていた。部屋の明かりを暗くすると，妻が作った美しいレースのカーテンを通して町の明かりが射し込んで来た。クリスマスツリーの青いランプが空の星のように見えた。揺り椅子の背にもたれながら，重労働のあわただしい数週間のことを思い返して，本当によくやったものだと感心した。「救い主がおいでになっても安心して中に入っていただける真新しくてきれいな部屋だ」と考えていると，夜の静けさを通して，「わたしが旅人であったときに宿を貸したという」声が聞こえてきたような思いがした。

飢え渇き，教えること

セオ・E・マキーン

本シリーズの第2部で，私は次のように述べた。「福音の教師には最良の同僚，すなわち聖霊がいる。そして非常に心強いことには，いつでも聖霊に頼ることができるのである。問題は私たちにある。私たちはどうしたらふさわしくなれるだろうか。」(『教える準備』「聖徒の道」1977年5月号，p.271)

第2部では教師に必要な特質について論じたが，この部では生徒が求めるべきこと，すなわち飢え，渇くこと——教授と学習が望ましい形で行なわれるように，霊的なものを渇望することについて考えたいと思う(『福音の教授と学習』「聖徒の道」1977年4月号，p.240の図を参照)。

「効果的に教えるには，まず学ぶ生徒の準備の状態に心を配らなければならない。」(ボイド・K・パッカー，*Teach Ye Diligently*「熱心に教えよ」p.107。本書の「準備の状態に応じて教える」を参照)

教師は知識や理解を生徒に植えつけることはできない。ただそれを提供するだけである。最も適格な方法でタイミングよく提供すること，それが教師の責任である。その知識を自分のものとするためには，生徒自身が，(1) 望み，(2) 知識を得るためのステップを踏み，(3) 心を開いて受

け入れることが必要である。

しかし生徒の中にはどういうわけか，霊的な理解を求めようとしない人がいる。そのような場合は，望みを生徒に持たせるという責任も教師にかかってくるのである。では，どのようにすればよいのだろうか。霊的に理解したいという気持ちを起こさせるのは，一体何であろうか。

一考に値するひとつの要素は，霊的な準備である。宣教師たちは教えに耳を傾ける人々を捜すのに苦労することが往々にしてあるが，それは受け入れる用意のできている人がまれなためである。

家庭や教会という環境の中で教える私たちにとって，この仕事はもっと簡単なはずである。みたまの声に従って霊的な経験をすでにしている人々に教えるからである。当然，反応の早い人もいれば，遅い人もいる。しかし私たちは，生徒が天父の子供の中でも選ばれた人々であるということを忘れてはならない。

ある時，故人J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は，私たち教師が末日聖徒の若人たちに対して取るべき態度を，次のようにはっきりと述べた。「あなたがたの生徒である教会の若人たちは，大多数が考え方や霊性において健全である。……

教会の若人は霊につける事柄に飢えている。彼らは福音を学びたいと思っている。希釈されない純粋な福音を求めている。……

そういう生徒たちは両親の持つ信仰を渇望している。純粋な福音を求めている。……

生徒たちは霊につける事柄の証に飢え渇いている。……彼らは，自分の求めている証が他人の証によって引き出され，育まれることを，自分の霊によって感じている。……

あなたのところに来る生徒たちは，霊性の完成を目ざして歩み始めている。従って，適切な糧を与えさえすれば，彼らは早くそこに到達できるはずである。」（*The Charted Course in Education*「教育の課程」pp. 4—6）

生徒には聖霊がついている

バプテスマを受けた人々は，すでに聖霊の賜を授かっている。教会における教師と生徒，家庭における親と子は共に，「神はその聖き『みたま』により，すなわち聖霊の言い尽し難き賜によりて，……知識を汝らに与えたまわん」（教義と聖約121：26）という約束を受けている。

私たちは，教える立場にある者として，生徒の内にあるこの光と真理の源を決して無視してはならない。私たちは教える時には，必ず聖霊の導くままにその務めを果たすべきである。しかも，それが教えを聞く生徒たちの心を打つという信仰を持って。「話を人の心の中に浸みこませる」（IIニーファイ33：1）のは，聖霊である。このことを忘れてはならない。

生ける水の湧く泉

たいがいの生徒は霊的な糧に飢えている。私たちが彼らを神に導けば，神が彼らに与えられる水は，まさに彼らの内にあって湧き出る泉となるであろう。

イエスは井戸のかたわらでサマリヤの女にこう言われた。「もしあなたが神の賜物のことを知り，また『水を飲ませてくれ』と言った者が，だれであるか知っていたならば，あなたの方から願い出て，その人から生ける水をもらったことであろう。……

この水を飲む者はだれでも，またかわくであろう。しかし，わたしが与える水を飲む者は，いつまでも，かわくことがないばかりか，わたしが与える水は，その人のうちで泉となり，永遠の命に至る水が，わきあがるであろう。」（ヨハネ4：10，13—14）

生徒たちがみたまによって学んだ真理に従えば，この生ける水は流れ続けるであろう。「わが誡命を守る者にはわれ王国の奥義を示さん。而してこれは彼の中にて生ける水の井戸となり，生ける水は湧き出でて永遠の生命とならん。」（教義と聖約63：23）

主はまた次のように言われた。「汝もし願い求むれば，啓示を啓示の上に受け，知識の上に知識を受け，かくて悦びをもたらし永遠の生命をもたらすべき奥義にして平和なることを知るを得べし。」（教義と聖約42：61）

そして，「『きたりませ』。また，聞く者も『きたりませ』と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は，価なしにそれを受けるがよい」（黙示22：17）と。

強制よりも招くことにより

キリストに来る者たちは命の水を価なしにくむことができるということに注目していただきたい。生徒はただで思う存分に命の水をくめるが，それも生徒自身の選びによるのである。主は予言者ジョセフ・スミスを通じてこう言われた。「然り，彼らもし来る心あらば，来り得て自由に価なくして生命の水を汲むを得べし。」（教義と聖約10：66）

教師は生徒に勉強を強いてはならない。アルマは息子のコリアントンにこう忠告している。「それであるからわが子よ。来たいと思う者は誰でも来て生命の水を自由に無料で飲んでよろしい。また来たいと思わない者は誰でも来ることを強制されない。しかしこの者は終りの日にその行いによって報いを受ける。」（アルマ42：27）

教師のなすべきことは，ただ生徒を招くことである。アルマはまたこうも語っている。「ごらん，神はすべての人を招いて憐みに満ちた手をかれらの方へ伸し『悔い改めよ，さらばわれ汝らを受けん』と仰せになる。

また主は言いたもう『われに来れ，さらば生命の木の実を食い，無料にて自由に生命のパンを食い生命の水を飲むことを得ん。』」（アルマ5：33—34）

私たち教師は強制するのではなく，生徒を招くべきである。しかし，ここで非常に重要になってくるのが，招き方である。特に，生徒があまり求めていない時の招き方が大切になる。魅力的で人を誘う教えを施さなければならない

のである。モロナイは父の言葉を引いて次のように言っている。「神から出るものはいつも人を善い行いに誘い導いて善いことをさせようとするから，すべて善い行いに人を誘い導いて善いことをさせ，神を愛させ神に事えさせようとするものは，神のみこころがこもっている。」（モロナイ7：13）

私たちは子供に強制的に学ばせることはできない。しかし子供にとって価値があり，関心のある事柄を教えることにより，学びたいという望みを起こさせることはできる。私たちの教え方は食べ物と同じである。味つけをして，食欲をそそり，口に合うものにすることが大切である。使徒パウロはこう言った。「いつも，塩で味つけられた，やさしい言葉を使いなさい。そうすれば，ひとりびとりに対してどう答えるべきか，わかるであろう。」（コロサイ4：6）

私たちが聖霊に満たされ，聖霊の導くままに人々を教える時，りょう原の火のようにその影響力が，生徒たちに広がることだろう。

一方，教師を活気づけ，生徒を鼓舞する聖霊の助けを受けずに教えようとすることは，ゴム製の槌を使い，冷えた鉄で馬蹄を造ろうとするようなものである。聖霊の炎以上に人の霊を温め，人を神に近づけてくれるものはない。従って私たちは決して聖霊を受けずに教えてはならないのである。聖霊を受けずに教えようとするならば，味を失った塩のようで，福音の教師としての私たちの努力は全く意味を持たないであろう。

私たちの時代に，主はこう告げておられる。「人々わが永遠の福音に召され，また永遠の誓約を結ぶ時は，その人たちは世の塩にして人に味をつくる者と認められる。

かかるが故に，彼らは人の味と呼ばる。されば，もしその世の塩にして味を失わば，見よ，その後は何ら益なくただ捨てられて人の足下に踏みつけらるるのみ」（教義と聖約101：39—40）

またこのようにも警告された。「されど彼らわが誡命を守らず，すべてわが言を聴きて守らずば，この世の国々彼らに打勝たん。

彼らは世の光として，また人々を救う者として置かれたれば，

彼ら人々を救う者ならずば味を失いたる塩の如く，かくして全く益なきものとなり外に棄てられて人の脚下に踏みつけらるべきなり。」（教義と聖約103：8—10）

みたまによって教える時，私たちは「光」（マタイ5：14—16）となり，「パン種」（ルカ13：20—21）となり，生徒を動かして福音を渇望させる「塩」となる。ところが聖霊を受けなければ，私たち教師は生徒にとってそれほどの影響を及ぼさないのである。パウロがテモテに，「わたしの按手によって内にいただいた神の賜物を，再び燃えたたせなさい」（IIテモテ1：6）と勧告しているように，私たちも自分のもとに来る人々に，バプテスマの時に与えられた賜を使うようにと忠告しなければならない。

大切な教師の態度

忘れてならないひとつのことは，生徒に対する私たちの態度と生徒の真理に取り組む意欲が，私たちの教え方に非常に深い関係を持つということである。

私たちが生徒の学習意欲を疑っていれば，教え方に力がなく，簡単なことしか教えなくなり，霊的にもの足りないことがままある。パンを求めている生徒に，「石を与えている」（マタイ7：9参照）ようなものである。

それに引き換え，生徒を信頼し，生徒を神の子供として見るならば，しかも内なる霊がかつて御父のみ前にいた時に得ていた同じ理解を新たに得ようと機会を求めている神の子供として見るならば，私たちは彼に命のパンを与え，生ける水の泉へ導こうとするに違いない。

生徒は私たちの態度を敏感に感じ取る。実に私たちはひとつひとつの言動に自分の態度を表明しているのである。そこで，生徒は私たちからどれほど信頼されているかを，またたくまに見抜いてしまう。彼らは，私たちからどれほど心にかけられているかを知り，私たちの愛や，あるいは愛のなさを感じとる。このように，生徒たちの福音に対する熱意が，私たちにかかっていることも多いのである。

イスラエルの民がカナンの地に入るに先立って，モーセはその地を探る者たちを遣わしたという旧約聖書の記事について考えてみていただきたい。彼らはカナンを，「乳と蜜の流れている地」だが，民は「強く」，町は「堅固」であると報告した。（民数13：27—28）

その時，12人の内の10人が恐れを表わし，「わたしたちはその民のところへ攻めのぼることはできません。彼らはわたしたちよりも強いからです」（31節）と言った。彼らがすべては主の命令通りになるという信仰に欠けていたことは，最後の次の言葉から明らかである。「わたしたちには自分が，いなごのように思われ，また彼らにも，そう見えたに違いありません。」（33節）

ところが，12人のうちのたったふたり，カレブとヨシュアだけは信頼を失わなかった。カレブは，「わたしたちはすぐにのぼって，攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」（30節）と言った。カレブとヨシュアの最後の言葉は簡潔である。「主がわたしたちと共におられますから，彼らを恐れてはなりません。」（民数14：9）

どちらのグループが教師として立派であろうか。カレブとヨシュアは主の召しに信頼をもって応えた。ふたりは，ニーファイのように，こう言ったことだろう。「私は主が命じたもうたことを行って行う。私は，主が命じたもうことには，人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり，それでなくては，主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである。」（Iニーファイ3：7）

主は教える私たちを助けて下さり，学ぶ生徒たちをも助けて下さる。私たちが主と共に働くならば，必ずや成功するのである。

準備の状態に応じて教える

ボイド・K・パッカー長老

注ボイド・K・パッカー著，*Teach Ye Diligently*
「熱心に教えよ」デゼレト出版社，許可転載

私がまだ子供の頃，近所の子供たちとよくした遊びに，「かんけり」という遊びがあった。日暮れ時になると，近所の子供たちが皆集まり，隠れ場所のたくさんある庭や果樹園でこの遊びをしたものである。この遊びは，まず，「オニ」になった子が，目をしっかりと閉じて，ブリキかんの上に立つことから始まった。そして「オニ」が数を数えている間に，他の子供たちは皆，適当な隠れ場所へと散るのである。そして「オニ」が「96，97，98，99，100！」と数え終わると，大声で「さあ行くぞ。用意ができていてもいなくても，つかまえるぞ」と叫び，この遊びが始まるのである。

以来私は，興味を失っている生徒と格闘している教師を見るたびに，また子供に時宜を得ないレッスンをしようとしている親を見るたびに，そうした教え方は，昔の遊びの延長のようなものであって，「さあ行くぞ。用意ができていてもいなくても，教えるぞ」と宣言しているような気がしてならない。

効果的に教えるには，まず学ぶ生徒の準備の状態に心を配らなければならない。何年か前，私がセミナリーで教えていた頃，ひとりの生徒が通学の途中に交通事故に遭って亡くなるという出来事があった。その衝撃で，その日は学校中が重苦しい雰囲気に包まれていた。生徒たちはこれまでになく，真面目に学ぼうとする心構えをもってクラスにやって来た。当時，私は教会歴史を教えていた。当日は，西部への開拓者の移動について教える予定であった。しかし，その日は，開拓者のレッスンは適当ではなかった。生徒たちには，キリストの贖いと復活と来世について講義を受ける準備ができていたからである。

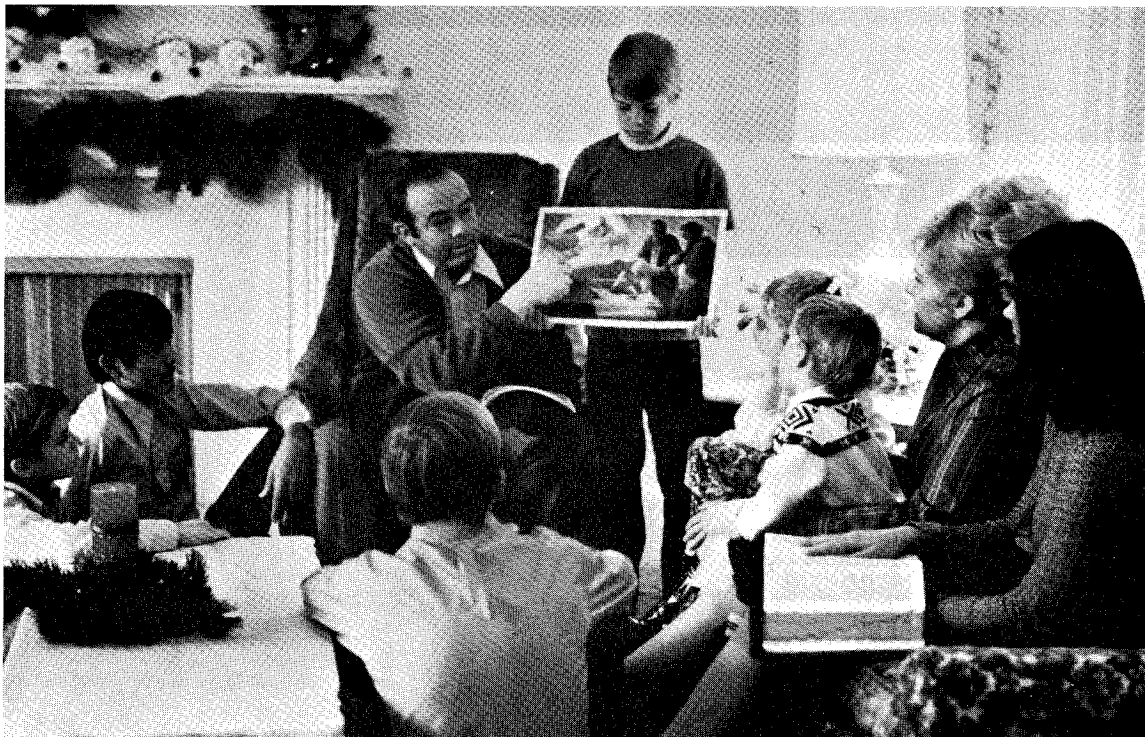
時期早尚に，余計なことを

公立学校における性教育の指導で，最大の難点のひとつは，また大きな危険のひとつは，今述べた重要な原則を無視して教えているということである。生徒たちの準備ができないうちに何もかも教えてしまうため，生徒の精神的，情緒的，道徳的安定感に大きな憂いを残すことがしばしばある。これでは大きな危険へ至る道を教えるようなものである。物事は，ふさわしい時に行なわなければならない。あらゆるものには最良の時があるのである。賢明な教師なら，また賢明な親なら，いつがその時か気づくはずである。

同様に，教会の活動を計画し，基本的な道徳の原則を教える場合，その対象者の成熟度や準備の度合を，賢明に考慮すべきである。基本原則を教えても，それが時期尚早であれば，生徒にとって何の意味ももたないであろう。しかし，それを教えるには，生徒の成熟度や準備の度合を理解することが大切である。

例えば，生徒がまだ幼くて，肉体的な欲望に心を乱されたという経験がない場合は，全く別の方法でそのことについて教える必要がある。年齢が違えば，教え方も異なるはずである。年齢が進めばもっと詳しい話ができる時期も訪れるであろう。しかし，いつの場合でもこうした問題は敬虔に扱わなければならない。

生徒に与える情報は，生徒の好みに合ったものでなければならないし，また生徒の学習体験から消化できる性質のものでなければならない。しかし残念なことに，親や教師が生徒の成熟度を適確に診断するために必要な，図やグラ



フやものさしやテストといったものは存在しない。従って，教え方をそうしたものに合わせて変えていくことはできないのである。つまりこれは，注意深く，かつ冷静に一人一人の生徒を観察していなければ，生徒に準備のできた時を察知することはできないということである。これはいろいろな事柄について言える。

今こそ，その時である

準備の原則は，子供たちを教える際，大切なことである。親はほとんど四六時中子供といるので，子供に教える準備ができたかどうかよく観察することができる。子供の質問や振る舞いから，また生活上の経験から，親は，教える最良の時を感じ取ることができる。また，親である限り，子供たちの準備ができている時を適確に感じ取らなければならない。

私たち夫婦は，子供が質問をして来たら，決してその答えを引き延ばさないことを習慣としている。その質問がどれ程ささいなものに思われようとも，あるいは私たちがどれ程忙しかろうとも，これまでどんな仕事でも中断して，喜んで子供の質問に答えてきた。これはつまり，質問するということが，とりもなおさず子供に準備ができているというしるしだからである。子供は，「今」知りたがっているのである。

空腹の時に食物を与える

私たちはこれまで，肉体における空腹と対象させて，触知することも，見ることもできない食欲を満たすことについて学んできた。子供が成長する過程で，私たちは，子供が空腹の時に食物を与えるということを習慣としてきた。そのようなことは極めて奇妙で，向こう見ずなことのように思えるかもしれないが，これまでのところ，非常にうまくいっている。

子供たちが学校から帰ってくると，温かい夕食が子供たちを迎えてくれる。4時半から5時頃，夕食をとるのである。子供たちは一日中学校にいて，血糖も下がっている。休みなく動いて疲れているので，家へ帰ってきた時には，空腹である。

こうした場合，ふたつの対応策が考えられる。クッキーとミルク，あるいはジャムつきのパンを用意してやり，夕食時までそれで持ちこたえさせる方法がひとつである。こうすると，普通，子供たちの食欲は減退し，夕食時には必要な分の食物を食べなくなる。もうひとつの方法は，子供たちが一番空腹の時に夕食を食べさせるという方法である。こうすると，子供たちは喜んで食べる。そして就寝少し前に，軽い食物を食べる。

十分な食事をとった子供たちは，自分の割当仕事や勉強にとりかかる，静かに遊ぶなど，それぞれに有意義な時間を過ごす。そんな光景を見るのは興味深いことである。

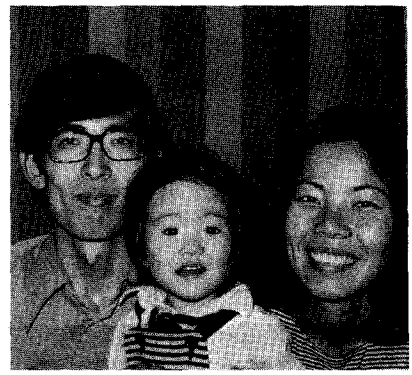
これに対して「それでは，父親は子供たちと一緒に食事をしないのだろうか」と，疑問が出てくることだろう。父親も，帰宅したらすぐに夕食を食べる。その時，子供たちはよく父親の回りに集ってくる。そうすれば就寝前の軽食時間が，実質的には，家庭の夕べのようになるのである。

こうした方法は，私たちの家庭の平安と安定に大いに貢献する。子供たちは空腹の時に食事が与えられるからである。

もちろん，この方法は教え方に応用できる。時々私たちは生徒の質問に即答しなかったり，おいしい物を与えなかったりするため，生徒の学習意欲をそいでしまうことがある。そして，生徒は，本当に必要な，霊的かつ知的な栄養を与えられないままになってしまう。

「用意ができていてもいなくても，教えるぞ」という叫びは，教師にとっても親にとっても，まずい忠告なのである。（第17章，pp. 107—108，114—116より抜粋）

感動の出産



日本横浜ステーキ部
大和支部
佐々木美恵子

「奥さん，おめでとうございます。来年の6月には家族が増えますよ。」私の喜びの鼓動が通じたらしく，顔をほころばせてそう言って下さったのは産婦人科の先生でした。天のお父様，ありがとう。ありがとうございます。生まれてくるまでのあと9ヵ月間，私はその偉大な業がお父様と共にとどこおりなく果たせるように一生懸命頑張ります。ですからお父様もいつも見守っていて下さい。喜びでいっぱいの気持ちとあふれる涙を隠しながら，私は家路を急ぎました。その晩，私たちは生まれてくる子供のことを考えながら，今まで経験したことのない幸せの絶頂にでもいるような気持ちで床に着きました。それはちょうど，私たちが結婚してまもなく一年になろうとする秋のことでした。

もともと冷え症の私は流産というこの世で最も悲しい思いを経験していましたので，今回は非常に慎重でした。冬も間近で，つわりもひどかったため，私は暖かい沖縄の実家にしばらく帰ることにしました。

私たちはしばらくの間でも離れ離れで生活するということを考えただけで非常なさびしさを感じました。でも丈夫な赤ちゃんが生まれるためなんだから……とお互いに励まし合い，そして神権の力で祝福をしてもらって羽田を発つことにしました。

実家では母のゆき届いた世話を受け，のんびりと日だまりを散歩したり，いすにもたれて編み物をしたり，また毎日というくらい夫から届く手紙に返事を書いたり，まるで絵に書いたような日々の中でお腹の赤ちゃんをいたわりながら過ごしていました。あまりにも静かで平和なこのひとときから，誰がその後あのようなことが起こることを想像できたでしょう。

もうすぐ4ヵ月に入ろうとするある日のこと，突然大量の出血があり，私は半分もうろうとした意識の中で救急車で病院に運ばれました。ベッドに横たわっている私の耳に先生の声と母の声が聞こえてきます。「先生なんとか助けて下さい。お願いします。」「いやぁあれ程の出血でしたら，もうお腹の赤ちゃんは助かりませんよ。でも来た早々に手術というのもなんですから止血剤をうってしばらく安静にしておきましょう。」私は高い崖からつき落とされたような大きなあの衝撃を今でもよく覚えています。

私は必死に祈り，そして奇跡を信じながら先生に訴えていました。「先生もうすぐ4ヵ月になります。ですから心音だけでも聞いてみて下さい。」無駄と思いながら私のはげしい涙声に，先生は看護婦に指示し，器具をお腹にあてました。まだ赤ちゃんも小さいし，あちこちあててもいっこうに鼓動が聞こえてきません。ダメだなと先生は何度も首を横にふりながら一生懸命にして下さっていました。もうこれで最後という時，「コト，コト，コト……」と赤ちゃんが，お腹の赤ちゃんが「私は生きてますよ」と叫んでいるではありませんか!!私は生まれてはじめて赤ちゃんの生命を知らせる鼓動を聞きました。ましてこのような状態の中で……この感動を私は筆に表わすことはできません。「天のお父様ありがとう，本当にありがとう」と私は心で叫びながら，涙でいっぱいの目をふきふき，この奇跡をかみしめていました。ところが大変なのはこれからでした。もっともっと大きな奇跡が私たちの信仰のうらに用意されていたのです。

二週間ほど，入院し，その間いろいろな薬をつかって出血はよくなったものの，完全に止血する状態ではありませんでした。それから寝たきりの生活です。しばらくして先生は「まだ止血が完全でないということはちょっとむずかしい問題です。東京の大学病院でよく調べてもらった方がいいでしょう。その検査は赤ちゃんには何の影響も与えませんから大丈夫ですよ」と勇気づけて下さいました。それから那覇支部の神権者である義兄の祝福を受けて，再び

東京に向かいました。私たちの再会は決して喜びとは言えませんでした。お腹の子供の夢を語りがなら別れたあの羽田とは全く違いました。さっそく私は大学病院に行き，検査を受けることにしました。その結果，「あなたは爆弾をかかえているような状態です」と先生はおっしゃるではありませんか。予期はしていたものの，それ程ひどいと思っていなかった私たちは，妊娠中最も恐れられる状態であることを知らされ，喜びであったはずのおめでたが一変して悲しみの中におかれてしまいました。

どんなに医学が進んでいても，それはどうすることもできないことでした。いざという時には一刻をあらそい，月が進むにつれて危険度は高くなるということでした。そして先生は，「今なら手術をすれば，母親だけは助かります。奥さんよく考えて下さい。このままでしたら，母親か子供のいずれかが助かっても，ふたり共守ることはできません。奇跡が起こらない限り……。」クリスチャンでない先生は捨てぜりふのようにあとの言葉をつけ加えました。まるで光を失ったように放心していた私の心の中に，「そうだ　奇跡だ！　神様が……」と叫んだかと思うと，一つの聖句がいなづまのように心をさしつらぬきました。それは伝道していた時，伝道部長が3年の任期を終えて帰られる最後の大会ではなむけの言葉とされた最も印象に残っていた聖句でした。

「人がその友の為に自分の命を捨てること，これよりも大きな愛はない。」（ヨハネ15：13）そうだ私たちの命は永遠なのだ。この世で命を失っても，また生きて再び愛する人々と会える!!　その時私はほほ笑みさえ浮かべてはっきりと「先生奇跡を信じます。ですから妊娠を続けさせて下さい。」とお願いして帰ってきました。だんだん日がたつにつれて，あれほど強く決心していた私の心の中にやはり人間的な弱さが顔をのぞかせてきました。時には「神様にすべてをゆだねたのだからしっかりしなさい」と自分自身を勇気づけたり，時には「幸福の探求」の映画の一場面を思い出しては霊界に行く前のあの暗い道を通る時どんな気持ちだろうかと想像しさびしさのあまりボーッとなったり，時には遺書を書こうと日記帳を取り出してはむなしくなって2，3行でやめたり，とにかく人間的肉体の弱さが私を死へ向かわせようとするのです。でも霊は，私とこの子は一度奇跡的に助かったのだから今度もまた神様の奇跡をみるにちがいないと信仰を燃え上がらせるのです。肉体の弱さと霊とのたたかいが続く中で，ある2通の手紙を受けました。1通はアメリカの姉妹で私の宣教師時代の同僚でした。「ソルトレーク神殿においてあなたのために特別なお祈りを捧げたので，きっとかわいい赤ちゃんが生まれます。頑張って!!」という言葉が書いてありました。もう一通は母からでした。母はクリスチャンではないのに，「私は毎日神様に祈っています。きっと大丈夫ですよ。最後までよく頑張ってね」という励ましの手紙でした。その時私は毎日汗のにじむような熱心な祈りを捧げて奇跡を信じてやまない夫の後姿を思い出しながら，気持ちを新たにし，二度と弱音をはくまいと心に決めました。

こうしていよいよ10ヵ月目に入りました。私は平和な気持ちで，私のお産のドラマはいったいどのように展開していくのだろうかと想像したりしていました。そしていよいよあと2週間という昼間の3時頃，神様は本当に自然にごく自然に奇跡を展開していきました。破水したのです。私の状態からはまず大量の出血から始まるといわれていたのに……ところが破水からはじまり，私のお産のすべての不安をまず神様はとりのぞいて下さったのです。先生も私以上に喜んだり驚いたり，「いやぁ，まさに奇跡です。これでもう大丈夫です。何の心配も入りません」とお産の準備を進めて下さいました。妊娠中たくさんの薬を使っていたのにもかかわらず，何の障害もない五体満足のかわいい女の子でした。そして産後の肥立ちもよく，私たちは心から神様に感謝の祈りを捧げました。私たちはこの子に「愛香（あいか）」と名付け，これまで多くの人々の愛を受け神様の助けによって誕生したこの子が，今度は人々に愛の香りを放つことができるようにという願いをこめて名付けたのでした。この奇跡がいつまでも彼女と私たちの絆を強め，私たちがお互いに励まし合いながらこの世においての務めを正しく果たし，来世で神様と共に住むことができることを信じて毎日の生活を送っています。私たちはこの子を見て，静かに瞑想にふけりながら，いつもこう思うのです。「あの10ヵ月間，別世界にいたかのように，そうまるで前世にもどっていたかのように過ごし，そしてそこから彼女を連れてきたのだと……。」いつもそう思うのです。イエス・キリストのみ名によって証致します。アーメン。

東京と大阪に２つのステーキ部が新設される

10月23日に日本東京ステーキ部大会（十二使徒評議員会会員トーマス・S・モンソン長老管理），10月30日に日本大阪ステーキ部大会（七十人第一定員会会長J・トーマス・ファイアンズ長老管理）が催され，それぞれステーキ部の分割が行なわれて，新たに日本東京北ステーキ部と日本大阪北ステーキ部が誕生した。

日本東京ステーキ部には管理者のトーマス・S・モンソン長老のほかに，七十人第一定員会会長J・トーマス・ファイアンズ，同会員アドニー・Y・小松長老，菊地良彦長老，また日本大阪ステーキ部大会には管理者のJ・トーマス・ファイアンズ長老とアドニー・Y・小松長老，菊地良彦長老と，ステーキ部大会では珍しく多くの教会幹部がそれぞれの大会に出席してこの度の分割が行なわれた。

また今回の大会で，日本東京ステーキ部の辻本泰明兄弟，日本東京北ステーキ部の丹羽三吾兄弟がそれぞれ祝福師に召された。

各ステーキ部の役員ならびに祝福師と管轄ユニットは以下の通りである。

日本東京ステーキ部

ステーキ部長　福田　真
第一副ステーキ部長　内山　雅宣
第二副ステーキ部長　八木沼修一

高等評議員　丸山　周兵
松本　潔
中東　幹夫
井上　龍一
寺坂　昇
堀口　従道
今井　一男
品川　文弘
大田原勝幸
大石　哲郎
追平　雍嘉
窪田　直隆

祝福師　辻本　泰明

管轄ユニット：東京第１ワード部，東京第３ワード部，東京第４ワード部，東京第６ワード部，ひばりヶ丘ワード部，東京南ワード部

日本東京北ステーキ部

ステーキ部長　岡本　亮
第一副ステーキ部長　横山　喜一
第二副ステーキ部長　斎藤　和雄

高等評議員　神成　弘昭
念垣郷太郎
小林　毅
高橋　実
神崎良太郎
山口　博
高井　淳一
菅島　太郎
木下　正成
稲村　利明

祝福師　奈良富士哉
丹羽　三吾

管轄ユニット：東京第２ワード部，東京第５ワード部，東京第７ワード部，東京第８ワード部，浦和ワード部，川越ワード部，千葉支部，柏支部，船橋支部

日本大阪ステーキ部

ステーキ部長　市道喜八郎
第一副ステーキ部長　中野　正之
第二副ステーキ部長　中島　　哲

高等評議員　浜田　博之
中尾信一郎
長谷川修一
白浜　俊幸
大村　励二
小松　　忠
平川　友正
大迫　信明
南本　邦男
山本　幸平
餅田　隆男
雪本　　治

管轄ユニット：大阪第1ワード部，大阪第2ワード部，大阪第3ワード部，堺ワード部，和歌山支部，奈良支部

日本大阪北ステーキ部

ステーキ部長　神尾　　昇
第一副ステーキ部長　中村　晴兆
第二副ステーキ部長　川口　高司

高等評議員　山内　威彦
阪本　頼彦
水野　敬一
山川　悦申
中川　一茂
田中　三則
守谷　歓二
長浜　　修
講崎　元清
原田　　明
瀬野　忠愛
山縣　正史

祝福師　安芸　　宏

管轄ユニット：岡町第1ワード部，岡町第2ワード部，神戸ワード部，西宮ワード部，尼崎ワード部，京都ワード部，茨木ワード部，池田ワード部

◇　◇

「聖徒の道」が装いを新たに！

「聖徒の道」をご購読いただき，ありがとうございます。

1978年1月号より大きさが変わります。小型化され205×147㎜になります。内容量は今迄と同じですので，頁数が少し増えます。印刷費，郵送費の節約とともに携帯にも便利かと思います。

今後とも，ますますご愛読下さいますようお願いいたします。

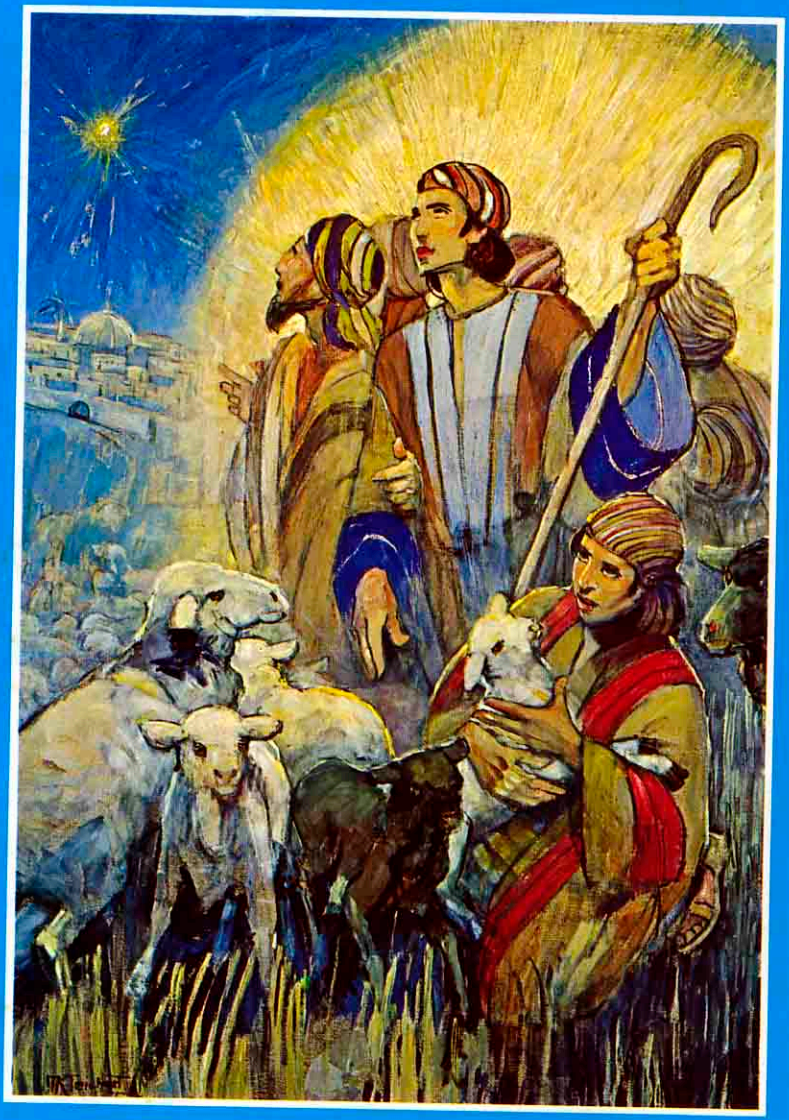
◇　◇

公　　告

会員その他利害関係人各位
規則第18条の定める手続を経て，下記の通り教会用地を買収しましたので宗教法人第22条の規定によって公告します。

昭和52年11月1日
宗教法人「末日聖徒イエス・キリスト教会」
代表役員　アドニー・ワイ・小松

支部名	所在地	面積
千葉支部	千葉市稲毛東2—5—13	1,419 ㎡
高松支部	高松市福岡町4—12—7	1,276.91㎡
札幌第3支部	札幌市西区手稲東3南3—1—2	2,542.43㎡
釧路支部	釧路市中島町6—2	1,677.84㎡
守口支部	牧方市朝日丘町434—2	1,765.83㎡

聖 徒 の 道

1977年12月20日発行（毎月1回20日発行）　第21巻第12号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可